
JETBLACK-P.D.G-

蘇芳ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

JETBLACK・P・D・G・

【Zコード】

Z3558Y

【作者名】

蘇芳ちゃん

【あらすじ】

罪には相応の罰を

そして、罰を与えたものには相応の報酬を循環することなくまた辿る

罪を犯した者咎人

そしてそれを裁く“ワレラ”

どちらもまた、醜怪な存在なのだろう

1 (前書き)

斬ります死にます殺します

作者の考えがところどころに含まれておらず、不愉快さを感じる可能性が高いかもしれません

戻るなら今でしょ

それでもいいと黙つながらどうぞ見てやってください

そして痛烈な批判なり、作者を悦楽に漫らせる感想なりを書いていつて下されば幸いです

考えが含まれているとは申しましたが、基本的に思つたまま思いついたまま書いたものなのでそこに意味があるかは私にも不明です
では前書きはこのあたりで終えて、どうぞ稚拙な文ですがお楽しみ下さい

“人が人を殺すことを良しとしないのは、同種族であり、理性の持ち主であり、法律の枷に縛られているからである。”

野生の熊なんかが人を殺したとして法律に裁かれる事はない。
なぜなら違う種族だからだ。

殺処分された場合、それが死刑だと言つかもしれないが違うね。
人間の場合、殺害方法にも依るが・・・1人くらいこの世から天に
送つたところで死刑になることは少ない。

他人の権利を蹂躪したにも関わらず、やつた側の権利は保護される。
・いやそんな下らないことはどうでもいい。

人は殺せば終身刑を科せられるが熊に終身刑を言い渡す馬鹿はいな
い。

つまりだな、誰かを殺したかつたら。
「ランクを一つ、上げるか下げる。」

そうすれば、我らを縛る枷の一切は金の鎖から、腐りきった鉄の針
金に変化する。

さあ、下げようか、上げようか。

S・A「上げるのは、自身の魂を昇華し神さんに近づく。下げるの
は、自身の魂を落とし野獣に近づく。ふーん・・・。」

ON「どうだ？」

S・A「いやどうって言われても。えー・・・上はナイト・・・
Kinght」と“Night”的ダブルミーニング。下は・・・

B、U、I、T、e?」

ON「BUITE、バイトだ。“Buy”と“Bite”、買うと
噛み付くを合わせた造語だよ。」

S・A「噛み付くってのはよく分かる。野獣は野生に従い気の向く
ままに噛み付き喰つちまう。」

ON「人は零、神は正、野獣は負。買つてでもプラスにしたいのさ。」

S・A「成る程。」

ON「それでお前はどちらになる?ナイトは基本的に刀や光を好む。
BUITEは自らの力と闇を好む。」

S・A「ははは。随分カッコつけてるよな。嫌いじゃないが。」

ON「・・・ただ、どちらを選んだとしても、咎人を十人殺せば零
になる。そうでない者を殺せば一発で殺される側に転向だ。・・・
ふむ、しかしお前の場合ワレラに加わる理由が理由だからな。姫に
仕え、護つて生きていきたいなら、お逃え向きなのはナイトだ。」
S・A「あんたが押し付けた理由だろうが。・・・ふーむ、じゃあ
取りあえずナイトでいい。もうこの暗い部屋に居るのも飽きた。」
ON「おいおいしつかりしろよ。やることほしつかりやつてもやらつ
しどれば殺す。それだけは覚えておけ。」

S・A「分かつてるつて。さあ始めてくれ。いや始めよ。俺は上
げる。」

ON「よろしいでは始める。そして始まる。」

突き詰めるのは正義の殺人

目には目を、歯には歯を、殺しには殺しを

殺されたいからお前は殺す

罰とは言わない

制裁であり死刑

我は成す我を成す

堕落の騎士の下に誓いを
私は殲滅します

OZ「では頼んだぞS・A。」

S・A「あいあい合点承知。それより聞きたいんだがこの本はなんだ?」

OZ「“ワレラ”に関する説明書とでも言つておこうか。ナイトとBUI^Teでそれぞれ違う。よく読んでおけ。」

S・A「オーライ。」

こうして俺はワレラのナイトになつた。

ワレラとは罪を犯したくせに相応の犠牲を支払わない奴にそれを払わせる部隊。

と言つても、それは腕を折ることであつたり殺すことであつたりとまちまちな支払いだが。

ワレラはナイトとBUI^Te二つのクラスに分かれている。

これ以上進化することもなれば増加することもない。

ネトゲじゃあるまいしそんなことになるわけないか。

クラス毎の説明は追い追い記されていく。

一人の咎人を殺す毎に経験値を得る。

十人殺せば只の人間、もとい零に戻り再びクラスを選択出来る。
その際経験値は受け継がれる。

ここで一つ破らない方がいいルールを教えてやる。

咎人以外の人間を殺した場合、貴様はまた咎人へと転身を遂げる。
一般人を手にかけることだけはするな

S・A「・・・うむ。分かつたんだけどさ、大体なんで俺が選ばれ
たか、未だに理解できねえんだが。」

「お前が選ばれた理由は簡単、お

S・A「あれにか? そつ悪うつてんなら脳外科医と知り合ひになついたからだ」

た方がいい。
」

「幸福の形は塵ほどある。それもまた然りだ。」

・・・じゃねえ輪廻は再び俺に廻つてくるのか？」

〇〇「働き次第だろう。貴様が次の死を迎えるまでに咎人を10人

「あれは再び乗れる出来なにれはそれまでだ」

行きたいんだが。

「お前の街だよ。良かつたな勝手知つたる場で。
「新町だよ。

「くれぐれも頼んだぞ。連絡は必要な時にこちからする。」
新西兰「れ

S・A「あいよ。じゅあ行つてへる。」

「 来い流星群。貫き、拘束しろ。 “ 千刃の谷 ” 」

アラビア語の歴史

そこにいる人を、影を、大地に縫い付けるために。

剣の対象である人物の体が鋼鉄と化す。

襲い掛かる全ての剣を弾いていく。

BUITeが使った“体内鋼鉄”はまだ分かる。

咎人を殺す時に役に立つだろうからな。
だがナイトの“千刃の谷”はどうだ。

咎人を殺すのにあんなモノ使う必要はない。

咎人なんてけつたいな名前が付いてはいるが、結局ただの人間だからな。

ま、今日の前で起きている様なことを想定してのことなんだろうが。

E・NE「・・・よし死ね野獣。速剣一閃。」

T・E「ア・・・ガ・・・。」

早いな・・・。

BUITeの後ろに回り込んだナイトが紫電一閃、獣の体を斬り裂いた。

T・E「ア・・・。」

バシュン。

獣は灰に、ナイトは光り消えていった。

E・NE「どうだ?」

消えてなかつた。

E・NE「見たところお前もナイトみたいだな。しかも見習いだ。
だが、クラス選択は正解だ。良かつたな。」

S・A「・・・は?」

E・NE「もしお前がBUITeなんて獣人を選んでいたらこの場
で終わりだつたぞ。」

S・A「なんでだよ。」

E・NE「俺はあんなモノをワレラと認めないからだ。・・・ふ、
ついでに言えば同胞を浄化した方が経験値もよく上がる。」

S・A「それについては何も言わねえよ興味ないし。浄化されても
文句言えねえし。」

E・NE「ふん、まあこれから宜しく頼む。俺はE・NE。」

S・A「S・A。」

E・NE「覚えておけ。」

バシュン。

今度こそ光の残滓を残しE・NEは消えた。

新西市。

都會でもなければ田舎でもない。

中途半端だが住み心地はそれなりにいい。

住めば都とも言うがな。

ワレラが集中する地もある。

何故かと言えば犯罪者、咎人が多いからだ。

その癖質の悪い、言つてしまえば狩るのにつまらない奴らばかりなのだ。

S・A「そのせいで同胞狩りがはかどつてゐるわけか。アホらしい。」

それを率先してやつてゐるのが、ナイト。

BUITeは獸に近いせいか本能に従い生きている。

そしてワレラの本能は咎人を殺す、もとい浄化することだ。

だからBUITeの方から同胞に戦いを仕掛けることは滅多にない。ナイトは、昨日会つたE・NEみたいに下等を良しとしない連中が多いらしい。

ナイト同士で戦つたりもするとか。

S・A「・・・まあそんなことどうでもいいか。俺の最優先任務は咎人を殺すことじゃないし。」

ONに押し付けられた任務はある人物の護衛。

どうもそいつは犯罪者を寄せつけるフヨロモンみたいなのが出てるようだ。

冗談だけど。

とにかく、街を出歩けば万引き犯から殺人犯までついて来るらしい。なんともまあけつた的な体質だよ。

殺されかけたのは両手両足使つても数えきれないほど。

誘拐された回数ともなると、100回を超えてるとかなんとか。

今までよく生きていたもんだ。

生き抜いてこられたのにもちゃんと理由がある。

そいつもワレラだからだ。

今のクラスはナイト。

今までの経験数、ナイト10回 BUIHTE 10回。

詰まるところそいつは、咎人を200人殺している。

自分から寄ってきたアホ共をな。

S・A 「俺より強い奴に護衛なんて必要ないだろ馬鹿らし。
やらなきや殺られるからやるんだけど。

S・A 「・・・はー、高校か。久しぶりだ・・・最悪。」

S・A 「転校生の阿部左宇ですよろしく。」

先生「はいよろしく。じゃあ阿部君は窓際の一番後ろの席に座つて

くれ。よーし授業始めるぞー静かにしろお前ら。」

・・・ち、なにが悲しくてまた高校生なんぞやらなきやならんのだ。
指定された席に向かう中、好奇の視線を浴びせられまくる。

非常に不快だ今すぐ帰りたい。

机に鞄を放り着席。

前を向くとそれに留つてこちらを見ていた奴らも前を向いた。
あーアホくせえ。

学内今まで護衛なんてやり過ぎだるクソ。

「よろしくね阿部君?」

右隣の女が話し掛けてきた。

S・A 「・・・こちらこそよろしく」

『それともS・Aと呼んだ方がいいのかな?』

S・A 「・・・成る程お前が、T・O・・だけか?」

T・O・・『ひらひら。私と同じ様に話しなさい。やり方分から
ない?』

S・A「・・・?」

首を捻るとT・O・・・は、はあとため息を漏らしやがった。
なんだつてんだよ。

T・O・・・『ONから説明書貰つたよね? 読んでない? それともそこだけ覚えてないとか~?』

S・A『そんなこと言われても覚えてなきゃ答へよつがないだろ・・・。
・。』

T・O・・・『あら出来るじゃない。』

え?

なにがだ?

T・O・・・『ワレラの人同士は、そうねテレパシーみたいなものが使えるの~。』

そういうやそんようなことが書いてあつた氣がする。

T・O・・・『話したいと思う相手に自分の意思を送る。そつすれば伝わるわ。ほらなんか言つてみなさいな。』

S・A『・・・あーあーマイクテスマイクテス。』

T・O・・・『そつそつお上手ねー。』

S・A『んで、お前の名前は?』

T・O・・・『おおじいたえ 大城妙よ。大城でも妙でも妙ちゃんでも呼び方はなんでもいいよ。』

S・A『じゃあ妙。』

T・O・・・『なにかな左宇君?』

S・A『お前本当は幾つなんだ?』

T・O・・・『出会つてすぐのレーティーに聞くことじやないね左宇君? 見たままが私だよー。17歳、高校2年生。』

S・A『冗談だろ?』

それで20回零になるなんて有り得ない。

T・O・・・『嘘でもなきや冗談でもないよ~。』

S・A『・・・お前その歳でなにやつたんだよ。』

T・O・・・『そうね。これから守られるんだし、私に対する理解は

深めておくべきね。7歳の時に殺したの父親を。』

S · A 『 そ う か。』

T · O · · 『 詳しく聞かないの?』

S · A 『 喋りたいなら喋つてくれ。俺は授業を受ける。』

T · O · · 『 そ。じゃあまたお休みにでもゆりつ話しもします。』

S・A「ふー。」

T・O・・「ううううう。高校生が煙草なんて吸っちゃダメでしょー。」

S・A「ばーか。俺は20歳なんだよ。」

体は17の時に変えられているが。

T・O・・「それでもよ。大体煙の臭いを纏いながら教室に行つたらどうやされるわよ。」

S・A「喧しいなあ。『我は成す我を成す』。」

光が一瞬瞬く。

S・A「はい。ナイト化すれば一瞬できれいきれい。」

T・O・・「詰まらないことに使うわね～全く。」

S・A「合理的使用法と書いてくれ。さ、そんなことよりお前を護衛しなきやいけない理由を教える。」

T・O・・「OZからなにも聞いてないの？」

S・A「奴は言つた。俺を浄化した時にな。“崇高なる輪廻に乗りたいか？ならば誓え。護ることを。”つてな。その護る対象がお前さんとしか聞いていない。」

T・O・・「にやるほど～それ殆ど聞いてないじゃない面倒ね～。まあいいわ私の事だし。なんでか知らないけど私は咎人に好かれてるのね。」

S・A「ああそれも聞いた。」

T・O・・「なら先に言つてよ～。それでね、それ自体に不満もなければ不足もないのね。咎人は殺されてなんぼだからね～。」

・・・ふむ、思つたより狂つた女みたいだ。

T・O・・「そんなことないよ心外ね～。」

S・A「・・・心読めるのか。」

T・O・・「ま～ね～。確か56人目で覚えたのよ。零の状態でも

使えるの。私に対する考え方をきや 読めないけどね。」

S・A「普段のテレパシーの強化版みたいなもんか。」

T・O・・・「そうね。でね、寄つて来る連中を殺^やることなんて造作もないんだけど、ちょっとした問題があるのよ。」

だから俺がこうして来たんだろう。

T・O・・・「日月火水木金土で構成される一週間。そのうち一日だけ正にも負にも成れない日があるの。いつそつなるか分からぬから厄介なのよね。」

S・A「ふーんそりや面倒だな^ご愁傷様。」

T・O・・・「ありがとう。そんなわけで貴方が護衛に選ばれたのね^ご愁傷様。」

S・A「ありがとう。なんたつてそんな面倒なことになつたんだ?」

T・O・・・「こればつかりは仕方ないのよね。君にだつてあるでしょ特性?」

S・A「・・・まあな。これつていつまで続くの?」

T・O・・・「護衛? さあ? 〇〇の気が済むまで^へとか?」

S・A「それはどれくらい掛かるんだよ。」

T・O・・・「分かんないね。」

S・A「・・・。」

いつまでとも知れないくだらない任務に俺は興じないといけないのか。

S・A「・・・ま、いいか。」

別段やりたいことがあるわけでもあるまいしな。

キンコンカンコン。

T・O・・・「予鈴ね。さあ戻りましょ。・・・うふふ。転校初日から学園一キュー^トな大城妙ちゃんと一緒にお昼摑つたなんて知られたら嫉妬に狂つた輩に殺されちゃうかもね^イヤーン。」

S・A「・・・死んでろアホ。」

T・O・・・「死ぬのは左宇君だよ。待つてー!」

・・・静止。制止。止まり動かない。零は無力。正は動作負は動作。
“ストップ”

S・A「・・・！なんだこりや。」

T・O・・・「来たみたいね～早速。しかも同胞が。」

6時限目の中盤、黒板を叩く音が止まり、ノートを走る音も止まり、俺が落とした消しゴムも宙で止まつた。

所謂空間停止状態つてやつか。

そんな名称あるか知らんけど。

S・A「今日は戦えるんだろ？な？俺はつい先日フレラになつたばつかだぞ？」

T・O・・・「だいじょーぶよ～。ぶよぶよ～。私の勇姿をその目に

根性焼きしてあげる。」

S・A「アホくさ・・・ん？」

遠くでキラリと光が一つ。

ガン。

それが剣だというのは学校に突き刺さつてから理解した。

光が百。

更にこちらに向かつて来る。

T・O・・・「“千刃の谷”ね。甘いし、ぶつ殺したくなる雑さだわ。

ズガガガガガガガガ。

学校に次々と剣が刺さつていいく。

S・A「お、おいおい。教室壊れるし人間も死ぬんじゃねえか！？」

T・O・・・「だいじょーぶ。“ストップ”内で動けない奴は死にもしなければ壊れもしない。Create剣。」

ギヤンツ！

ギヤンギヤンギヤンギヤンギヤン。

妙が襲い掛かる剣の内、俺と妙に確實に当たるであろう物だけ弾く。
T・O・・・「・・・・つまんない。ちやつちやと来てくれないかな。
どうせ雑魚なんだろうけど。」

S・A「た、確かに。“千刃の谷”で勝てないと理解出来てない
から来ないんだろうし。」

T・O・・・「そゆことね。・・・もう飽きた。私の力を見つめたま
ま蒸発しろー。燐燐煌煌突き刺す光“スレイ・ライ・サントエク”。

「

妙の右手から鋭い光が放たれる。

光の軌跡が未だ放たれていた剣を熔かし、元を貫く。

T・O・・・「・・・死んだね。」

S・A「呆気なつ。こういう時のお約束はまだ生きているか、もつ
と強い奴が不意打ちを仕掛けてくるかだる。」

T・O・・・「前者は確實にないよ。殺すと言つたら殺すし、蒸発さ
せると言つたら蒸発させる。でも後者はありえるかもね。」

S・A「なんでだ？」

T・O・・・「静止。制止。止まり動かない。零は無力。正は動作負
は動作。“ストップ”はそれなりにこなしてないと使える呪文じや
ないの。・・・で、お出ましのようね。」

S・A「そのようだ。Create剣。」

背後に生じた気配。

この威圧感は新西市に来てすぐ感じたモノだな。

「まさか、こんなに早く再会するとは思わなかつたぞS・A。」

S・A「はん。俺もだよE・NEとやら。」

俺の目の前でBUIITEを殺したナイトだつた。

T・O・・・「左宇君E・NEのこと知つてるんだ？」

S・A「ああ知り合いさ。」

E・NE「その通りなのだよ獣騎士。」

獸騎士？

「…。」は、私がナイトもBUSHIもやっているからな。

いには田舎のIT業界を嫌いしてゐるからね」

緒に居ては穢れが移る。私と共に来たまえ。
」

S・A「お前は気に食わないし妙を護衛する

に着いていく理由はない。

田：ア田・ふ
それを命したのは○アタマ？そんなも

カジミは、口説一が、

「殊勝な心掛けだ殺したくなる。」

「全くねえ。」

S・A「・・・アホやつてんじやねえよ。どいつもするんだ妙?」「・

文部省編
小説文庫

E・NE一同感だな。殺す。殺す殺す殺す。正義の下に殺戮。
の名譽に於て殺戮。殺戮の下に殺戮。魂の蒸発。体の昇華。死の頌
歌。^{うか} 集え裏切り指輪は点す。“ベルンズ・ニー・グリング”。

தோட்டு காலை

田へ田の手に刀身が深紅の劍が出現する

召します最後の血。
‘ B
L
O
O
D
Y
-
M
A
R
Y
,

グラムの刀身が更に紅を増す。

「…あなたが一回周してもなこの辺強くなつたも同胞殺しちゃうでしょ。」

「同胞？笑わせるな。獣と騎士が同じ種族なわけがないだ
うつ？」

黒い光が一瞬妙を覆う。

BUILT e化か。

「……むつかつくわねー。暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い。地に伏せ、叩き込まれる杭。幾百の杭で喰いちぎる。『イステーク・ネスダク』。」

・NEU ぬ！？があ！？ぐ！

やけにあつさり捕まつたな。

逃げ延び遅しのよねあー

両手両脚を杭で打たれていた筈のE・Z-Eが消えている。ついでに言えば出血の跡も見られない。

○ 何處に行き世が二たば

「アーニー、君の手紙が届いたよ。」

「なんだよ、こう広い範囲の索敵とか出来ないのか。」「無理ね。そんな便利な能力持ち合わせてないわ。」
取りあえず廊下に出てみる。

卷之三

静寂と灰色に包まれた壁と窓と床があるだけで人の姿はない。
・・・グラムまで出しておいて逃げるとは思えんが。
E・N E「その通り。私は此処に居る。」

居た。

灰色に縞れて悠然と立っている

カツカツと足音を起して妙もん下り注ぐ

「当たり前だ。教室は狭く戦いにくい。騎士同士の決闘ならござ知らず、獣との戦いには広い方がいいだろ。」

に。巣くわせ蓄え喰らひ廻くす。悪魔の剣。死を運び生とす。“ボスティア・ラ・グロア”。

E・NEの紅い剣に対し、妙が召喚したのは黒い刀身の剣だ。

E・NE「ふん。流石は野獣だ。名も無し誇りも無しのそんな剣を召喚するなんて。」

T・O・「黙りなさい。」

E・NE「ふん。」

沈黙を覆つさらなる沈黙が場に漫透する。

二人の間に火花が散つてゐるよう見え

いや・・・実際に散つてゐるじゃん。

T・O・「・・・まだまだ遅いねE・NE。」

E・NE「く・・・！」

仕掛けたのはE・NE、それをT・O・が樂々受け止めてゐる。武器の強さで言えば妙のグロア”の方が劣りそなものが・・・。T・O・「幾つもの屍を越えてきた。この子は悪魔。強さを増してこるの。」

E・NE「ぐう・・・！」

T・O・「・・・早く終わりたいでしょ？」

E・NE「なに・・・？」

T・O・「終わらせてあげる。来い流星群。常世の闇をこじく。貫き、拘束。死を運び生とす。“千刃の谷”グロア”。」

E・NE「な！？」

幾千もの悪魔の剣が降り注ぐ。

E・NE「ぐーおのれえー！」

ギャンギャンギャンギャンギャン。

S・A「おーと・・・。」

とばつちりが激しい。

E・NE「ぐーぐーぐーぐーおのれ組み合わせだとー・ふざけるなよおおおー。」

ギャンギン。

「ふん。スピード上げるわ。」

「なにい！？」

・NEが段々後退していく。

更に弾ききれない悪魔の剣が

E. Z. T. چکھکھکھکھ- ۱

右脚に一撃、悪魔の剣が食らいついた。

ト　〇　・　・　「　・　・　・　ストップ。」

三·五·二·一·」

ト。・。・。『どめが欲しい?』

・NEUT ほだけ！ 来い流星群。 賀

ト
・
・
・
「馬鹿。
グロアニ

エ・ズエ「ぬあつ・・・・!」

剣が二本、全てがE・NEの心臓を貫いた。

「あ・・・・ぐがあ・・・・」ふつ。おえ。」

・**ニ**が口から鮮血と泡を噴き出す。

「おのれの・・・は、は・・・。」

丁度、一瞬、匂いがした。匂いは汚い血で汚されて、もろともがく。

ザシユツ。

一閃、E・NEの首が宙を舞う。

バシュン。

・・・とまあ俺にとつて激動の一週間が過ぎていった。
うむ、はしょりすぎだな。

もう少し詳しく、俺が死んだ辺りから思い返そつか。

一週間前、つまり4月4日、俺は父親を殺し、そしてワレラの誰かに咎人として殺され、浄化された。

そして4月5日、5日だと思うが、ONに呼び出された。

そして『崇高なる輪廻に乗りたいか？ならば誓え。護ることを。』

なんてことを言われた。

黒い部屋に連れていかれ、ワレラについての説明を受け、二つ返事でワレラに成った。

言っちやなんだが犯罪者を戒めるだけの楽な仕事だからな。
けど騙されたよ全く。

同胞同士の争いはあると聞いてはいたが、頻繁に起るなんて聞いていない。

まさか新西市に行ってすぐ同胞の戦いを見る羽目になるとはね。

昨日死んだE・NEと名も知らぬBUIITEとの戦い。

今の俺はBUIITEには勝てそうだったが、E・NEと戦えば確實に死んでいたな。

結局戦うこともなかつたが。

その二日後、高校に入り護衛対象であるT・O・、もとい大城妙に会い、俺以上に強い妙に何故護衛が必要かを聞いた。

そして顔も知らない雑魚からの襲撃を難無くいなし（妙がだけど）、

その後のE・NEの襲撃も苦無く破りついでに（妙が）殺した。

その後は普通に授業を受け、そして下校。

そのまま一日無断欠席をし、今土曜日で学校は休みというわけである。

T・O・、「である。じゃないでしょあんぽんたん。」

S・A「あんぽんたんて・・・。」

可愛いな言わないけど。

T・O・・・「ありがと。」

S・A「なんも言つてない。一日の無断欠席なんて大したことじゃない。理由があつたしな。」

大体卒業した高校をまた2年生から受けなきやならんとかどういう冗談だよ。

T・O・・・「一田田はあんたが街を探索したいから休んだ。私も巻き込まれてね。」

S・A「ふん。護衛対象にボディーガードが着いていくのは当たり前。逆も然り、だろ?」

T・O・・・「聞いたことないわよ。ガードに着いていく護衛対象なんて。」

S・A「一田田はお前が強制零になつたせいだろ?」

T・O・・・「別に学校に行つたつてよかつたのに。」

S・A「お荷物抱えて街に出るなんてやなこつた。」

T・O・・・「はー全く。」

S・A「それに、お前ん家に居るだけで面白いからな。」

罵ばつかで面白い。

空き巣なんかもよく入るらしく、それ用に罠を張つてゐるらしい。ただ・・・。

S・A「あれ本氣で殺しにかかるよな。」

T・O・・・「当たり前でしょ。乙女の箱に忍び込むなら死ぬくらいの覚悟はしてなきや。」

S・A「・・・今まで何人が犠牲になつたんだ?」

T・O・・・「死んだのは7人。重軽傷者多数つてとこね。恐ろしいな乙女の箱。」

S・A「それにしてよ、昔から同胞同士の殺し合いはあつたのか?」

T・O・・・「そうね。私が知るだけで100人くらいはそれで死ん

でるわね。あ、でも30人くらいはまた輪廻した奴だからー。」

S・A「…、そのうち何人殺した?」

T・O・「E・NEを合わせて5人くらいかな、覚えてナッシュングー。」

S・A「思つたより倒してないんだな。」

T・O・「あんたは私をなんだと思ってるのよ。」

S・A「すまんすまん。」

T・O・「確かに新西市はワレラが多いからE・NEみたいに同胞殺しに走る奴も多いわ。でも全員が全員そうじやないから安心して。BUILT eが襲つてくるなんてことは殆ど有り得ないし、ナイトもナイトを狙うことは少ないから。」

S・A「あーそれについてなんだが。同胞殺しが多いのはなにも密度が濃いから、ってだけじゃないだろ?」

T・O・「そうね、同胞の方が経験値が高いから。」

S・A「それは知つてる。」

確かE・NEが言つてた。

T・O・「んん、まあいつか。どうせいつか知ることだし。あのね、同胞は咎人10人分なの。」

S・A「ん?だから経験値が高いんだろ?」

T・O・「…あらら。それすら聞いてないのね。全くのこの奴は…。」

…?

T・O・「咎人を10人殺すと零に戻るわけなんだけど、その時貰えるモノがあるの。」

S・A「あー…、大体予想がつくなそこまで言われると。」

T・O・「言つちゃうと魂の補充なのね。」

やつぱり。

T・O・「咎人を10人殺すともつかい輪廻に乗れる。また10人殺ればもつかいつて具合に増えてく。」

S・A「そして同胞を殺しても、か。」

T・O・・・「そ。クラスチョンジする必要がない奴にとつては同胞殺しが楽なわけね。」

樂、か？

S・A「全然樂じやないと思つんだが。」

T・O・・・「君みたいな新人さんを狙つのが常套手段なのよ。ね？樂でしょ？」

S・A「嫌な手段だ。およそ騎士道精神なんかとは似ても似つかない精神構造の奴しかいないのかよ。」

T・O・・・「分かつてないわね。ナイトよりBUSHIののがよつ

ほど綺麗よ？」

本能に従つことがか・・・。

T・O・・・「そーよ。ただ綺麗なのは美しいつて訳ではないといふことは覚えといてね。」

S・A「・・・心を読むな。」

T・O・・・「いいじやない。私に對して投げかけた心の声なんだから。」

S・A「はー。まあいいや。食後の運動がてらちよつと歩いてくるよ。」

T・O・・・「夜だよ危ないよー？着いてこようか？」

S・A「大丈夫だ。危険を感じたらすぐ逃げる。『我は成す我を成す』。」

T・O・・・「そー。いつでらー。」

日曜日深夜1時。

暗い夜道を歩いていく。

特に面白みもない散策だ。

当てがあるわけでもなく、目的があるわけでもない。

俺みたいな出無精がわざわざ目的もなく散歩なんてするわけがない

んだけど。

理由はある、あの嬢ちゃんの前に居たくなかったからだ。
いたたまれないというかなんというか。

とにかくあれ以上あいつの前に居たくなかった。

今あいつは強制零でもなんでもないからほかつといても平気なんだ
ろうが。

S・A「・・・ふー。危険に晒されているのはむしろ俺の方か。」

“千刃の谷”と“ソードファイツシユ”。

俺が今使えるのはこの二つだけだ。

咎人相手ならこんなもん必要ないが・・・同胞相手だとまずいだら
うな。

BUI-Teに絡まれることは少ないらしいけど・・・ん?

・・・ああそういうことね成る程。

俺が歩いている道の脇から男が一人曲がってきて、俺と同じ進行方
向へと歩を進め始めた。

つまり俺はそいつの背中を見ながら歩いている訳だが・・・。

『空き巣』7回、『引っづくり』15回、『窃盗』細かいものも入
れれば数え切れず。

俺達ワレラは人間が犯した罪を見ることが出来る。

そしてある一線を超えていれば、“咎人”と背中に大きく書かれる。

今日の前に居る奴はまごうことなき屑でありそれだ。

先に挙げた3つに加え極めつけがあつた。

S・A「・・・コイツが第一の犠牲者か。始まりとしちゃ地味だし
出来ればスルーしたいが・・・。」

男「おい！なんやてめえこひやじひや後ろでブツブツ言こよつて口
ラアツ！」

S・A「・・・日本語で喋れよネアンデル北京ピテクス。」

男「ア？んだよてめえは？！殺されてえのかゴラア？！」

S・A「そう・・・極めつけは『殺人』1回。」

Create剣。

右手に名も無い剣が召喚される。

男「な、なんやワレ！ やろうつてんか！？」

S・A「アホぬかせ。初戦だ、飾るためにせめて痛みがないようここで殺してやる。」

男「はあ……？ お、おいなんだよてめえは……来るなよおー！ や、やめ……！」

……ち、この野郎……。

ズバッ。

S・A「すまんな。嘘は吐かない主義だったが、気が変わった。お前は苦しんで死ね。」

男「は……はひは……たた助け……。」

頸動脈と手首の動脈、ついでに脚の腱を斬つてやつた。

血はちびちび出るように斬りはしたが、出血が止まる事はない。歩いて逃げようにも腱が切れりや歩けない。

S・A「ま、贖罪だと思って甘んじて受けなおっさん。それがお前の犯した罪の報いなんだから。」

男「あ……うわあわ……まつまつ……待つてくれ……。おねがだたずげで……。」

S・A「喧しい。……お？ 今日はお客がたくさん様だ。」

さつき男が曲がつてきた道から次はパンチヤクザが出てきた。

男2「ワレえ一体どこのもんに手え出したか分かつとるんか？」

・・・ヤクザのパシリだつたのかあいつ。

S・A「縄文入くらいの知能レベルは持ち合わせてるようだなんだった。」

男2「……嘗めたことぬかしとると一族郎党皆殺しやぞ？」

S・A「は。面白いやつてみろよパンチピテクス。」

男2「おんどれ……指じやすません。」

S・A「……ちまちました罪は重ねていない。やつたのは『殺人

加担』4回、『見殺し』7回、……『殺人』5回か。」

男2「な……！ なにもんやキサマー！」

お、ヒ首を抜きやがつた。

ホントにあんなもん持ち歩いてんだおもしろ。

S・A「俺は単にお前を殺す者だよ。さて祈りな。そして好きな神さんを思い浮かべる。そうすりや死んで幸せだらうよ。」

男2「ぬ、ぬかせえや！」

ヒ首がこちらに向かつてくる。

実際はヒ首をもつたパンチがだけど、パンチよかドスのが危険でありパンチは危機感を持つ相手に相当しない。

S・A「・・・使つてみるか。来い流星群。貫き、拘束しろ。“千刃の谷”」。

ドスッ。

男2「・・・は？」

呆けた男2の顔と突き刺さった剣。

どうやら状況を理解できていないようだ。

鈍い野郎である。

ドスドスドスドス。

S・A「・・・ほら思い浮かべろよ？」

男2「が・・・あ・・・・！」

S・A「ふん。」

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガ。

元はコンクリ、アスファルト？

どちらか知らんが碎け礫となり宙を舞う。

壊されたことに対する復讐か、俺に向かつてくる礫も幾つかある。

が届く前に粉塵と化し、俺の目を若干痛めることしか出来ない。

男2、死亡もとい浄化完了。

ネアンデル北京ピテクスは・・・じつちも絶えてるな。

S・A「・・・はあ送るか。バイバイ。」

その言葉と共に二つの死体は塵と化し、夜空に舞い上がつていった。

TV「本日未明新西町16番地で道路が破壊されているのを近隣住民が発見。警察に通報しました。警察は、ここ最近起きている道路の破壊行為や土手が何かで削られる事案と関係があるか捜査中です。」

「シャコシャコシャコシャコ。」

あー・・・昨日のは俺のせいだけか・・・?
これは見つかったら逮捕されるんだろうか。
だとすると困るなー、一応前科無しで通つてるからなー。
多分見られていた。

大体あんだけズガガガガやつてれば誰でも気づくだろう。
少なくとも5人くらいの視線は感じていた。
全部が全部普通の人間かは分からぬが。

T・O・・「これやつたの左宇君?」

S・A「ああ。絡んできたヤクザ一人を送つてやつたんだよ。」

T・O・・「そ。」

S・A「興味なさ気だな。」

T・O・・「無いもん。ワレラが相手なら心配くらうはしてあげる
けど人間相手なら心配するだけ無駄だし。」

S・A「まあ確かに。」

T・O・・「君はなにか感想ないのー?」

S・A「なんのだ?」

T・O・・「初めて、でしょ?」

S・A「ああそういうことか。特になにも。感動もなきや罪悪感もない。」

別段これが初めてというわけでもないし。

更に言うならまるで無関係の人間だからなにか感じる方がおかしい
と思う。」

俺は人間じゃないんだし。

S・A「ん? なんだよその顔は。俺の返答が不服か?」

T・O「そーじゃなくてね、たつた数日で心の中隠すの上手くなっちゃつたなーって。」

S・A「ぱーぱーじゃ詰まんないだろ?」

T・O「む~それはそんなんだけどねー。」

S・A「はいはいこの話はお仕舞い。で? 今日まだつすんだお前。」

T・O「今田はね~ 日曜なの」

んなもん知ってる。

T・O「取りあえず歩く? 焚人呼んで稼ぐ?」

S・A「あーーー歩くのはいいがその後はいらんかな。」

T・O「そつ~でも寄つてきたらあげるからその気でいてね~。」

S・A「ーーーあいよ。」

はー。

T・O「ん~ おいしー。」

S・A「よく食うな。太るぞ。」

T・O「体重なんてナッシーシーニング。でしょ?」

S・A「まあな。」

ベンチに座りクレープを食べている妙。

その脇にはクレープの包み紙が山となつていて。

俺達は太らないし食べなくても死ない。

ワレラは一度この世から消えていて当然本体は消失している。なので誰かに「えられた」みたい 欺体で生活している。

欺体は姿形全てを自分で設定出来るので、身長2m体重30kgなのに筋骨隆々なんて体になることも出来る。

詰まるところ今の俺達には身長も体重も存在しないんだ。

T・O・・「ある意味楽だけど人間離れしすぎよね～。」

S・A「へえ。お前人間っぽい方がいいのか？」

T・O・・・「んにゃ～そんなことないよ。ただなんでこんな特別製にしたのかなと思って。」

そりや狩る方だからだろと言おつとした時気づいた。

黒服の厳つい奴らがぞろぞろとこちらに向かってくるのに。

T・O・・・「んー？なにあの人達？」

S・A「昨日殺つた二人があいつらの同業者だつたんだよ。」

T・O・・・「へえ・・・みんな『殺し』やつてるみたいね。」

正面から向かってくるのは7人。

『殺人』や『殺人加担』などがぶかぶか浮かんでいる。

左を見ると4人、右から6人、後ろから10人。

S・A「合計27人か。俺にも咎人が寄る体が『えられていたとはな。』

T・O・・・「どう考えてもお礼参りでしょ。良かつたねー。2つの魂とお釣りが貰えるよ～。」

S・A「・・・やらなきゃならんのか。」

T・O・・・「嫌なの？」

S・A「いや・・・。」

まあ仕事だからいいか。

男「おい兄ちゃん。」

ベラベラと話していたら27のヤクザに囲まれていた。

男「ちょっと面あかしてもらおうか。」

T・O・・・「あ、私の剣使う?というか使ってくれないかなー。経験値溜まるし。」

S・A「ん?別にいいけど。」

T・O・・・「おっけー待つてねー。」

男「おい無視してんじゃねえよー。」

S・A「あー?なんですか?」

男「くつ・・・てめえ・・・!」

男2「おおお落ち着いて下下さい兄さん…」「ワワガキ…ちゃんと話聞
かんかい！」

T・O . . .「ん~なにがいいかしらね~。」

S・A「別になんでもいいわ。」

・・・あらうなんか銃をちらつかせてる奴も居るよ。
この街中だぞ？

男「おどれ昨日家の舎弟を殺りやがつた奴だな？」

S・A「なんのことでしょうか？」

男「しらばつくれんじや」

T・O . . .「決一めたー！“我は成す我を成す”。」

男「ぬおつー？」

いきなり光つた妙にビビつたのかヤクザ共が若干俺達と距離を置いた。

T・O . . .「サン・ピエールの歯。サン・パジールの血。同教サン・
ドーの髪。サント・マリアの衣の布端。12勇士の魂。自傷の剣、
されど壊れず眠りに就く。“デュランダル”。」
妙の右手に大剣が召喚される。

刀身180㌢、幅20㌢、鈍い紫色の刀身に黄金の柄。
ロランの歌に出てくる“デュランダル”それである。

T・O . . .「はい。」

S・A「おう。」

ズシツとぐるがけして重いわけでもなく、手にしつかりフィットする。

男3「な、なんやこいつらー？」

男4「馬鹿野郎！うるたえるなーあんなもん模造刀に決まつとひつ
が！」

男5「男27も喚いている。

そりやいきなりこんなもんが出てきたらビビるわな。

男「成る程・・・そっちがその気なら容赦せえへん。」

S・A「街中でチャカぶつ放すのか。今日田のヤクザは自由だね。」

男「じゃかあしいわ！」

喧しいのはてめえだよ肩。

スパン。

ボトッ。

S・A「お！？」

超使いやすい！

男「え？な・・・なななな！？がああああああつ俺のつうでがああああつ！？」

わあわあ喚きながら田の前の男は地に落ちた自らの腕を拾おうとしている。

が、両腕とも肘から先が無いのだから広いようがない。

S・A「いやーすごい使いやすいんだけどこれ。」

T・O・・・「『使い勝手』が付加されるからね～。初期で手に入る特性にしては便利なのよねーそれ。」

S・A「『使い勝手』？」

T・O・・・「後で教えるよ。それよりビビッちやつてる他の咎人もさつたと殺つちゃいなよ。」

妙の言葉に、田の前で起きた惨劇に言葉を失つていたハゲ共がビクンと反応した。

S・A「そうだな。」

デュランダルを横薙ぎに軽く振るう。

男2とかその他5人の上半身と下半身が分離。

下半身は立つたまま上半身が地面にずり落ちズチャリと音を起てる。

S・A「はいお大事にっど。」

次いでデュランダルを振り上げ男8を縦に真つ二つにする。

S・A「Create剣。」

左手に出現させた2本の剣を男9～男10に投げつける。

断末魔なんてあげられない。

だつて喉を貫くんだから。

男11「なんやねんこれ・・・がつ！？はつ・・・！」

男11の背後から大剣を突き刺す。

痛いだろうな。

そのまま下に下ろし切り抜くと内臓が地面にバタバタと落ちてきた。

T・O . . 「うわーソーセージだよ左宇君。結構グロい殺し方するね～君。」

S・A 「ほつとけ。」

あと16人か。

S・A 「もうここまでやつちましたんだから“千刃の谷”とか使っていいか？」

T・O . . 「別にいいよ。」

S・A 「オーケー。来い流星群。貫き、拘束しろ。“千刃の谷”。」

男「が・・・あく・・・。」

S・A 「あーらまつ。まだ生きてるよ」の人。」

腕を切り落としてから3分くらいしか経つてはいないが、まだ生きてるとは驚きだ。

ちなみに生きていって、かつこの場に残っているヤクザはコイツだけ。他は殲滅し既に送つてしまつた。

S・A 「さ、思い浮かべろよ。お前の信じる神さんをな。」

男「つ！？やめ・・・止めてくれ・・・。」

S・A 「・・・阿漕な商売の“つけ”だ。甘んじて受けろ肩。」

振り上げたデュランダルを振り落とし・・・頭が斬れた時点で男は塵と化した。

S・A 「27人浄化。」

体内に何かを感じる。

T・O . . 「それが魂だよ。暖かいでしょ？」

S・A 「二つの補充か。クラスも変わってないらしい。ま、戦闘の途中で零にされなくてよかつたぜ全く。」

T・O・・「そうね。じゃあさつと此処を離れましょ。見物人も沢山居るみたいだしね。」

周りを見渡せば確かに人がちらほら見える。

S・A「そついや大丈夫なのか?俺達普通に顔見られてるんだけど。」

T・O・・「なによーそんなことも知らないの?正か負に成つて時の私たちの顔はぼんやりとしか分からないの。カメラなんかじゃ完璧に認識出来ないわ。つまり私たちが捕まる」となんてない。心配事はそれだけかしら?」

S・A「あ、ああ。」

T・O・・「じゃあ帰りましょ。同胞も居るみたいだし長居はむよー。」

P4・D1「ふむん。」

E2・D1「どう思うよ兄。」

P4・D1「いやそれよりだな。」

E2・D1「は?」

P4・D1「いやこいつのつてお約束だよな主人公的な奴の戦いを影から見て意見するつての。」

E2・D1「あー確かにね。」

P4・D1「戦つてた奴は新人だな一緒に居たのはT・O・・だつたがあいつらどういう関係だ?」

E2・D1「仲間なんぢゃないこの前のE・N・Eの襲撃ん時も一緒に居たみたいだし。」

P4・D1「そついやそつだつたな別段おかしなことじやないが珍しくはあるな。」

E2・D1「まあいいんぢゃない放つておけば俺達の邪魔する訳でもなさそうだし。」

P4・D1 「 そ う だ な 」 “俺” の 邪魔を し な き や 邪魔じ ゃ な い か ら な。

「

T・O・・・「殺す。殺す殺す殺す。正義の下に殺戮。騎士の名誉に於て殺戮。殺戮の下に殺戮。魂の蒸発。体の昇華。死の頌歌。集え裏切り指輪は点す。“ベルンズ・ニー・グリング”。ダーインの遺産。生き血を。魔剣の真価。熔かし吸い尽くす。“ダーインスレイヴ”。サン・ピエールの歯。サン・パジールの血。司教サン・ドニの髪。サント・マリアの衣の布端。12勇士の魂。自傷の剣、されど壊れず眠りに就く。“デュランダル”。常世の闇をここへ。常夜に。巣くわせ蓄え喰らいくべくす。魔剣。死を運び生とす。“ボスティア・ラ・グロアディ”。

ジークフリートの剣グラム。

魔剣ダーインスレイヴ。

シャルルマー二世の12勇士の一人ロランの剣デュランダル。名も無き魔の剣グロアディ。

S・A「そつそつたるメンバーだがこれが一体なんなんだ？」

T・O・・・「さつき言つた特性について説明してあげよーと思つてね。Createで創る剣とかと違つて、ちゃんと呪文を練る剣は学習するの。咎人を浄化したり、同胞を殺したり、すると経験値を積んでくのね。」

S・A「ほうほう。それ普通は説明書に書いとくことじやね？」

T・O・・・「召喚呪文を覚えると追記されるよ。左宇君は今2周したよね？もしかしたらもう使える呪文ふえてるんじやないかな？」

S・A「ふむ。“私は成す我を成す”。

説明書を取り出し、ナイトの項目をペラペラめぐる。

“千刃の谷”・・・ソードフィッシュ”・・・。

S・A「お、“Tarnkappe”と“BLOODY-MARY

”が追加されてる。」

T・O・・・「あーじやあまだ経験値溜まる物はないね。んじやー

引き続き説明するね。まー簡単に言うと、咎人とか同胞を殺つちゃうとレベルが上がつてく、そうすると特性つてのがつくの~。でー、今出したグラムは $L \vee 2$ 、ダーインスレイヴも $L \vee 2$ 、デュランダルが $L \vee 4$ 、グロアディが $L \vee 5$ なのね。」

S・A「レベルだけ聞くと強いのかどうか分かんないな。」

T・O「何人倒すととかは説明省くねめんどくさいから。 $L \vee 1$ の特性が『折れにくさ』、 $L \vee 2$ は『使い勝手』、 $L \vee 3$ は『重さの無視』、 $L \vee 4$ が『形状無視』、 $L \vee 5$ が『追撃?』。」

S・A「…はあ?」

T・O「特性の詳細もめんどいから割愛ね~。」

S・A「…まあ大体分かるからいいけど。」

自分で確認すればいい話だしな。

T・O「そうね~早く使えるようになるといいね~。」

S・A「他人事だな。その通りではあるが。」

T・O「なんなら私を殺す? 魂補充50あるから余裕よ?」

S・A「そんなことしたら輪廻から即効外される。」

T・O「だろうね~。」

S・A「…。」

T・O「喋る話題無くなつたね~。」

包み隠さず言い過ぎだろコイツ。

S・A「そうだな。明日は学校だしそろそろ寝るわ。」

T・O「私も寝よ~。じゃあね。明日が零の日じゃないことを祈つてお休み~。」

くらいくらいくらい。

太陽の届かない地上の楽園。
地上なかどうかは知らない。
楽園なかどうかは知らない。

分かるのは魂の拠り所であり環の一環であるということだけだ。

暗いが静かではない。

そこから嘆きや悲痛な泣き声が聞こえる。
それとは対照的な明るく談笑する声が聞こえる。

此處は魂の拠り所。

地の獄に行く者は前者。

天の国に行く者は前者。

どちらも輪廻の環から外れる老いた魂。

輪廻の環に取り込まれた者は後者。

E・NE「・・・遅い。」

後者に混じり剣を片手に立つ一人のワレラ。

悪魔の剣により貫かれた彼は一度拠り所に戻ってきた。

魂補充は19あり輪廻に乗り続けるのは簡単である。

だが現世に戻るためにはそれなりのプロセスも踏まなければならぬ
い。

それを華麗にスルーする強者もいるが、彼はそれ程の強さは持ち合
わせていない。

また割り込みする度胸も無ければ、これまた強さもない。
だから手持ち無沙汰に時を過ごしている。

時間を浪費、もとい消費したおかげか、彼の前に並んでいた魂は消
え、今受付している目の前の魂が消えれば次は彼の番である。

ただ目の前の魂が今までの魂の倍程時間をとっている。

E・NE「一体なんだコイツは・・・。」

コイツが座つてから既に1時間は経っている。

今すぐコイツにグラムを刺してしまいたい衝動を抑えるのを止めた
くなってきた。

“千刃の谷”の一小節目を詠唱したくなつてくる。

・・・・・・・・

ああ、もうダメだ。

魂の背後に近づき言つてやる。

E・N E 「おい聞^{つか}えてんだよさつせとしる。」

D・W・「でな、その時私は言つてやつたんだ。お前が私のために千本目になつたらどうだ? つてな。」

受付「ほーつ。そんな逸話が隠されていたとは。」

・・・・・。

受付と田の前の奴はあるで関係ない話をしていた。

E・N E 「おい!」

D・W・「んー? なんだ? は?」

E・N E 「順番待ちだよ! 聞えてんだからひつわと終わらせりー。」

D・W・「終わらせると言つてもな。終わらせる事柄が私にはないのだから終わらせようがない。」

E・N E 「あ? なに言つてんだお前? 僕はさつそと現世に戻つて奴を狩りたいんだよ!」

D・W・「ふむ・・・・また今度にしたら」

E・N E 「ふざけんなよ。」

グラムを相手の首筋に当てる。

受付「お、おい待てよE・N E。」

E・N E 「喧^{けん}じいてめえは黙れ。」

イライラし過ぎて仮面が外ってきた。

E・N E 「おら、最後尾に行きたくなかったらさつそと退け。」

受付「ばっかやろ・・・!」

D・W・「・・・まあいいじゃないか受付。おい下郎、年上であり、格が違う相手への口の聞き方を私が直々に教えてやる!」

E・N E 「喋るんじやねえよ。状況把握も出来ないのか?」

D・W・「ふー。私が思つていいよつは格が下のようだな。」

E・N E 「なんだと・・・ツ!」

首筋に冷たい感触。

これは・・・日本刀か・・・?

D・W／「祢々よ、コイツは斬るに値するか？」

E・N E「祢々・・・？あ、もしかして“祢々切丸”・・・？」

D・W／「ほう、知っていたか。まだ使えないだろうになかなかどうして博識だな御主。」

そんな・・・。

“祢々切丸”を詠唱無しで召喚するなんてありえない！

一体コイツはなんだ・・・？

D・W／「轍醍醐わだちだいご、と名乗つておこう。」

E・N E「な・・・！」

D・W／「御主程度の心など容易く読めるわ。聞えているのだつたな。よろしい、ならば『』が後ろに行け下郎。」

ドツドツド。

E・N E「・・・え？」

三本の“祢々切丸”が体を貫いた。

“千刃の谷”とのコニオン・・・？

いや違う・・・だ、だつてこの攻撃は・・・！

D・W／「特性『剣岳つるぎだけ』は初めてか下郎？よかつたな、魂に余裕があれば次に生かせる。今はまた、最後尾に戻れ。」

E・N E「ぐ・・・。」

この短期間に・・・2回も失うとは・・・。

朝、喉が痛くなることが無くなつた。

歯を磨かなければ払拭されることのない朝の不快感が消えるといつことがこれ程幸福なことだとは思つていなかつた。

S・A「・・・。」

洗面所に立ちながら思つ。

何故寝起きの氣急さは消してくれなかつたんだ。

口内の不快感を消し去るのも重要だがこつちも重要だ。

大体欺体なのに血が出たり寝起きが悪いとか意味が分からぬ。

栄養摂取の必要が無く、身長体重も無い。

中途半端に人から離れてるな。

パシャパシャと水で顔を洗う。

冷たいけどなんか違うんだよな。

いやこれはワレラとか関係なく。。。

T・O・・「冷たいよね。井戸水を汲み上げの淨水しーのなんだけど温度は変えずなのよ。夏はいいけど冬なんて凍りそうになるよ。」

S・A「いや温水も出るけどこれ。」

T・O・・「私は温かーいを使わない主義なの。」

S・A「・・・あつそうですか。」

T・O・・「ま一直ぐ綺麗に出来るから洗う必要ないんだけじね。」

」
と言ひながらバシャバシャと顔を洗う妙。

今更だが俺達は同じ家に住んでる。

妙が生前住んでいた家で、父母は共にいない。

そして超広い。

そして畳いっぱい。

うら若い女・・・もといこの女と一人なんてやばいんぢやないか」と
思うかもしけんが、そんな感情は全く湧かない。

ワレラだからなんのかとかは分からんが、まあどうでもいいこと
だから氣にもならん。

人間の環から外れた奴が考へることではないからな。

T・O・・「なーによ。こんなに可愛い女の子と屋根の下で生活
してゐるのに襲おうとも思わないなんて君不惑症かEDなんぢやない?

S・A「アホくさ。俺の体は既に消えてんだから不惑症もクソもな
いわ。」

T・O・・「えーそつかな?」

S・A「はいはいそろそろ準備しないと遅刻するぞ。」

T・O・・・「あはは“ストップ”あるから余裕よ～。」

・・・ダメな奴だ。

ワイワイガヤガヤ斯く斯く然々。

S・A「・・・」

喧しいなあ。

窓際の一番後ろの席はいい。

俺に話し掛けるためにはわざわざ後ろを向かなければならぬし、喧騒の環から外れてもいる。

T・O・・・「ねえねえ左宇君。」

・・・右隣りの「イツが居なければ更に静かになるの!」。

S・A「なんだ?」

T・O・・・「先生遅いね～。」

S・A「・・・」

T・O・・・「あれ?起きてる左宇君?」

S・A「・・・」

T・O・・・「あ～“んなこと言わなくても分かる”ね。確かにそうなんだけどさー、しようよ言葉のキャッチボール。」

早く来い来い先公。

T・O・・・「先生だよー。」

S・A「・・・」

何気にキャッチボール出来てんじやん。

T・O・・・「私は口から言葉を発するキャッチボールがしたいの。」

S・A「・・・はあ。お前も氣づいてんだろ?」

T・O・・・「まーねー。」

少々耳が良い奴なら聞こえるかもしけんが、廊下の隅の方からうちのクラスの先公とあと一人名前も顔も知らん先公、そしてあと一人、

そいつらに囲まれている生徒が話している。

S・A 「遅刻した奴を指導してゐるってとこか。

でも遅刻ぐらいで三人に囲まれるか普通。

T・O . . 「かれこれ100回くらい遅刻してゐるからね。」 そろそろお祝いしなきや。」

S・A 「誰が捕まつてゐるかも分かるのか?」

T・O . . 「ワキューレル・ヒルデ・リュブン」。ワルキューレの一人ブリュンヒルデを召喚してゐるよ常に。」

S・A 「マジか。」

T・O . . 「マジだよ。ついでに言つちやうと怒られてる人はフレラなんだ。」

S・A 「そつちもマジかよ。」

「マジマジ大マジ。」

S・A 「は?」

俺の前の席、さつきまで俺に背を向けていた奴が顔を向けている。

S・A 「おいおいのか妙?普通にワキュなんとかとか聞かれたつぽいぞ?」

T・O . . 「問題ナッシングなのよねーこれが。」

S・A 「は?」

「だつて僕たちも同族だから。」

今度は妙の前の席の奴がこちらに顔を向けていた。

S・A 「同族つて。」

『 そうつまりフレラだよ。』

俺の前の奴がテレパシーぽいので語りかけてきた。

「大丈夫戦おうとか考えてないからT・O . . と同じで僕らの邪魔をしなければだけだね。」

S・A 「へえ。じゃあ取りあえず名前を教えてくれよ。」

P4・D1 「俺はP4・D1太宰だざい・ペルソナだ痛い名前とか言つなよ大体これ本名じゃないし。」

E2・D1 「僕はE2・D1太宰秀しゅういち これ本名ね。」

S・A「ふーん。まあ、ようじしくペルソナに秀一。」

P4・D1「ああよろしく。」

E2・D1「よろしく。」

P4・D1「よろしくとは言つが必要以上に絡むことはない。」

E2・D1「一般生活においては友達として過い」すのもいいね楽しいし。」

P4・D1「だがワレヲの方では基本的に不干涉。」

S・A「不感症?」

E2・D1「不干涉ね話の腰を折らないでよ左宇。」

P4・D1「まあそれも相互理解相互利益が伴えばその限りではない。」

E2・D1「そういうこといつつて有益な話を持ち掛けるのは大歓迎だ。」

P4・D1「そしてまた逆も然りそちらにとつて有益な話を持ち掛けることも大歓迎そうだろ?」

S・A「あ、ああそれは確かにそうだが。」

もうちょっとと切つて話せんのかこいつらは。

T・O「相変わらずよく喋る兄弟ね。」

P4・D1「必要なことを話すのは当然だろ?」

E2・D1「そして今話しているのは必要なこと。」

二人「ドウヤンダスタン?」

・・・ドウヨーランダースタンド、か。

T・O「イツエース! ザツツラーハト。」

S・A「分かつた理解した。だから前向いてくれ鬱陶しい。」

P4・D1「そう邪険にすんなよ左宇。」

E2・D1「そうだよこれから長い学校生活よろしくやつて」つよ左宇。」

T・O「そうだよー左宇君。友達とは仲良くなきやねー。」

S・A「・・・。」

必要以上に干渉しないんじゃないのかよ・・・。」

担任「こらー一席着け黙れー。ほらそこ、お約束とか言つな。」

またペルソナが口を開きかけたところで担任が教室に入ってきた。

・・・はあ助かつた。

担任「おい阿部。」

S・A「・・・なんすか?」

担任「後でちょっとこっち来いな。理由は言わんでも、分かるな?。」

S・A「・・・はいはい。」

助かつてなかつた。

T・O・・・「災難だつたね左宇君。」

S・A・・・・不公平だろ。お前だつて欠席したのに。」

T・O・・・「だつてー私は無断欠席じゃないもーん。」

あの後なんと生徒指導室まで連れていかれ、一時限目を消費し説教していただいた。

学生の本分とはなんなのだろうか。

P4・D1「いや根本的に左宇が悪いだろ。」

E2・D1「悪いね。」

S・A「喧しい。それよりなんでお前らも居んだよ。」

P4・D1「別にいいだろ欺体とは言え学校内かわい」ひやんランキング10位以内に入ってるんだよT・O・・・は。」

E2・D1「君だけ一緒にいると不自然だし好みの対象になるよそれを防いであげてるんだ感謝してほしいくらいだ。」

・・・ふむ、男を三人も侍らかすビッ

T・O・・・「それ以上考えたら1個削るよ?」

S・A「おうなんにも考えてないぞ。」

T・O・・・「よろしい。」

首筋から剣の感触が消える。

恐ろしい女だ。

T・O・・・「なんか言ったー?」

S・A「いやなにも。」

つぐづぐ、である。

キンコンカンコン。

P4・D1「ありや昼休み終了5分前を告げる鐘だ。」

E2・D1「なんというか寸足らずな鐘だよねこれ戻りう。」

慌ただしい一人が慌ただしいまま屋上から屋内へと行ってしまった。

S・A「俺達ももど

」

・・・はー。

またかよ。

灰色掛かる目前の世界。

“ストップ”だ。

誰かが“ストップ”を使い時の流れを遮断した。

S・A「今日は一体誰だよ。」

E・NE「私だ。」

お前かよ。

T・O「あら~思つてたより遅かつたわね。込んでた?」

E・NE「・・・聞くな。」

P4・D1「あつれーE・NEじやん。」

E2・D1「お久しぶり。」

・・・なんで戻ってきたんだ

お前らが来たらますます面倒になるだろ。

E・NE「な!? 太宰がなんでいるんだ。」

P4・D1「はー?」

E2・D1「此処の生徒なんだからいて当たり前だろ。」

E・NE「・・・成る程。もう一つ聞きたい。なんの用だ?」

P4・D1「久しぶりに稼がせてやろうと思つてな。」

E2・D1「たまには殺らせないと不機嫌になるんだよね。」

S・A「なんだお前らが殺つてくれるのか?」

P4・D1「出血大サービスだ。」

E2・D1「黙つて後ろで見てろそして思い知つとけ。」

二人「力の差をな。」

T・O「そーねいい機会だしそーしましょー。」

妙に促され屋上の端に移動する。

E・NE「・・・クソマジかよ。」

P4・D1「不運だなかわいそつに。」

E2・D1「心にも思つてないけどいいよね?」

E・NE「・・・殺す。殺す殺す殺す。正義の下に殺戮。」

騎士の名

誓に於て殺戮。

殺戮の下に殺戮。

魂の蒸発。体の昇華。死の頌歌。

集え裏切り指輪は点す。

“ベルンズ・ニー・グリング”。

隠れ蓑。

受け取る返り血。竜の魂。不死の騎士。終局にて墮落。ニー・ベルン

グの指環“グール・ジフ・リートシズク”。

グラムと、ニー・ベルゲンの歌の主人公ジークフリートが召喚された。

E2・D1「は情けないね。」

P4・D1「その程度の呪文くらい詠唱拒否しろよ情けない。」

E・NE「・・・喧しい。喧しい喧しい喧しい！殺れジークフリート！」

ジ1「ウオオオオオオオ！」

P4・D1「勇ましいな“グール・ジフ・リートシズク”。

E2・D1「威勢はいいね“ボスティア・ラ・グロアディ”。

ジ2「・・・」

ペルソナ達もジークフリートを召喚し、グロアディを持たせた。

しかしながらどうか。

同じジークフリートなのになにか違う。

・・・ああ視覚的な問題だな。

E・NEのジークフリート、ジ1とでも呼ぼうか、こいつの体の周りには青いオーラ的なのが漂っている。

対してペルソナのジークフリート、ジ2とでも呼ぼうか、こいつは赤いオーラが漂っている。

そういえば持っている剣もそうだ。

ジ1のグラムは赤いオーラが、ジ2のグロアディには黒のオーラが漂っている。

E・NE「な・・・。お前、その剣・・・！」

ジ2「我が一人の主、貴様では及びもつかんことを理解したな。誇りが無ければ去れ。そうでないなら、私に向けたその切つ先を断ち切るまでだ。」

ジ1「誓めるなよ。」

E2・D1「誓めるなと申されてもね。」

P 4・D 1「実力に差がありすぎる。」

E・N E「く・・・ああ忌ま忌ましいー何故こうもついていないんだ！」

ジ1「主、どうするのだ！」

・・・はーん、召喚体って普通に喋るんだな。

T・O・・「レベルに関係なく人型とか悪魔、天使なんかは喋つてくれるよ。ちゃんと自我を持つてるからね」面白いよ。」

S・A「あれは、E・N E側が不利つてことでいいのか？」

T・O・・「不利なんてもんじやないよ。Create剣で戦えば勝つのは多分E・N Eだけど、そんな風に戦うわけないしね。」

ふーん。

P 4・D 1「ほらどうするんだE・N E？」

E 2・D 1「早くしないと君のジークフリートがイライラで突っ込んでくるよ。」

ジ2「・・・。」

E・N E「く・・・行けジークフリート。」

ジ1「了解した。援護射撃は任せるー。」

ジ2「勇ましいのは良しとするが、蛮勇は誉められたものではないな。」

ちらつとジ2がペルソナに顔を向ける。

P 4・D 1「殺つていいよリセットしてやれ。」

ジ2「仰せのままに。」

パキン、ズクツ、ズガガキンキンキン。

E・N E「・・・く。」

・・・一瞬だつたな。

ジ2が振るつたグロアディは一閃、まるで反応出来ていないジ1のグラムを断ち切る。

そのままグロアディはジ1の体を貫いた。

が、ジ1の背後から無数の剣がジ2を襲うべく迫っていた。
一撃一撃はジ2の足元に撃ち込まれたが残りは全て弾かれてしまつた。

ジ2「・・・ふー。」

P4・D1「残念だつたなE・NE。」

E2・D1「グラムのレベル死んじやつたねご愁傷様。」

E・NE「・・・Create剣。」

ジ2「ふむ。戦う姿勢は美しい。敗者に成るべく歩むのもまた然り。」

E・NEがジ2との距離を詰めていく。

P4・D1「無理するなよE・NE。」

E2・D1「そんな剣爪楊枝にしかならないよ。」

E・NE「喧しい・・・！」

ジ2「美しい、とは言つたがそれは激突の瞬間までだ。そして

「

スパン。

E・NEの剣は無いが如く断ち切られ、E・NEの体はただ少しの障害としかならなかつた。

E・NE「あ・・・か・・・くつは・・・。」

ジ2「散り際こそが最も美しいのは言つまでもない。」

バシュツ。

E・NEの体が灰になり消えていった。

ジ2「主よ、終わりましたがいかがなさいますか?」

P4・D1「オッケー帰つていいよゆつくり休め。」

ジ2「承知しました。E2・D1様グロアディをお返しいたします。」

「

E2・D1「んじゃねー。」

続いてジークフリートが光に包まれ消えていった。

P4・D1「さてどうだつたかな左宇。」

E2 · D1 恐れ慄いたかそれとも感動したか?」

S
・A
・・・
いい気はしないな。
」

P4・D1 「あれ？」

E2・D1「なんで?」

灰の世界に色が戻ってきた。

ほんの少しだけ戻るを教室に
遅刻すんな二で言われてんだよ担任に

P 4 · D 1 “ 魂の権限を私に ” 』
授業中、いきなりペルソナが B U I T e 化した。

「……おしゃれ妙こいには一体何せてんだ？」
「……『定時連絡みたいなもんだよ』。』

Hasan S. V. 1993. *Handbook of the *Arctiidae* (Lepidoptera) of the Palaearctic Region*. Part 1. *Arctiinae* (partim). Brill, Leiden.

手猟の名犬。食らい尽くせ“ワイルド・ハント”。

「アーヴィングの死」

・D1『安心してなにを殺しに行つたとかじゃないから』

「ワイルド・ハント」は基本的に情報収集とか追尾しか出来ないから。

卷之三十一

いなかなどを調べているだけだ。

それ、今やる必要あんのか?『

日門在異方全圖

『E2・D1』の時間ならきつとなく起きるはずだ。

どうこう理屈だよそれは。

E 2 · D 1 『なんだつて？』

S · A 『独り言だ。』

E 2 · D 1 『まあいいや説明してやるよ。』

P 4 · D 1 『何故13時13分を選んだかといつと。』

その後授業を聞きつつ、兄弟の声を代わる代わる聞き、たまに右隣りからの笑い声を聞きながら一時間過ごした。
・・・気に留めるんじやなかつた。

男「ぐ、あ・・・！」

S · A 『はい』めんよ。悪いのはお前だ。好きな神さんを思い浮かべな。』

男「やめ・・・てくれ・・・。」

S · A 『・・・有りがちなやり取りだが、そつこつお前は命乞うされてやめたのか？』

男「うぐう・・・やめてくれよ・・・。」

S · A 『もうちょっとマシな匂い方をしろよ。』

T · O 『・・・ちょっと～まだー？』

S · A 『ああ悪い。もう終わらせる。』

S · A 『C re a t e剣。じゃあな糞野郎。祈つて、贖罪でもしてりや救われるかもな。』

ザクッと一突き田の前の咎人の心臓にくらわせぬ。

男「・・・ぐ、は・・・。」

S · A 『・・・そんな田で見るな。』

因果応報・・・回つてきただけだ、対価を支払う時が。

巡り巡つて帰つてくるものに、恩なんて結局存在しない。せいぜい復讐くらいだ。

男が灰になり消えていく。

S · A 『なあ、妙。』

T・O・・・『・・・・・ 聞いてるよ。』

S・A「いつかこれも帰つてくると思つか?」

T・O・・・『さあどうだかね。君が今殺した男がワレラに成ればありますことね。』

いつになく真面目に答える妙。

T・O・・・『君は、行為に正当性を見いだせないの?』

S・A「さあどうだかね。」

T・O・・・『・・・・・。』

あれ?

なんか怒つてる?

T・O・・・『まあいいや。さつさと帰つといで左宇君。』

S・A「・・・・?あ、ああ。」

T・O・・・『・・・・苦いよ。』

男「は・・・やめろ!?」

D・W・・「ふむ。腑抜けめ。他の命を奪つておきながら口にその覚悟がないとは。」

ビルとビルの間。

左宇が咎人を殺していたビルの真反対の路地で、違うワレラが今まさに左宇と同じことをしようとしていた。

D・W・・「全く情けない。人は世代を超える毎にその性根を腐らせていった。己はその最先端を行つているようだな。さあ名乗れ。死に際に名を残す。重要なことだ。」

男「あ・・・、田澤、田澤だ。」

D・W・・「田澤か。承知した。私は轍醍醐。拠り所に行つた時、私の名を出せば少しは優遇されるかもな。重ねる祢々。」

醍醐の右手にある大太刀が田澤の首を撥ねる。

D・W・・「すまんな祢々。詰まらぬことで重ねてしまつて。」

太刀が若干振動した。

D・W／-「ふむ。確かに。また今は殺人鬼だな。」

また振動。

D・W／-「そうか。懐かしいな一度の大戦。ふ。まあ急くな祢々。意外と近いのかもしけんのだからな。」

まだ残っていた田澤の体が灰になり消えていく。それと同時に轍醍醐の姿も消えていた。

あ、増えてる。

昨日で30人目、零化3回、ナイト4回目、魂補充が3に、そして使える呪文に“スレイ・ライ・サントエク”と“ベルンズ・ニー・グリング”が追加された。

S・A「・・・よし。殺す。殺す殺す殺す。正義の下に殺戮。騎士の名誉に於て殺戮。殺戮の下に殺戮。魂の蒸発。体の昇華。死の頌歌。集え裏切り指輪は点す。“ベルンズ・ニー・グリング。”」

グラムが召喚される。

赤い刀身の剣が青いオーラを纏っている。

S・A「・・・成る程。レベルは1～20まで。0～5は青いオーラ、6～10は赤、11～15は銀、16～19が金、20が黒か。」

「

ということは秀一が出したグロアディはLV20ってことか。そりやE・NEに勝ち目はないわな。

あいつが出したグラムは赤いオーラだった。

6～10の間の剣が20の剣に勝てる筈がないからな。

T・O・-「なーに見てんの〜ってグラムじゃん。」

S・A「昨日でジャスト30人だつたんだ。“スレイ・ライ・サン

トエク”も使えるようになつたぞ。」

T・O・-「へー。やつと護衛として役に立てるくらいになつたね

」
「

S・A「そうかな。」

T・O・・「そうよ～。なんなら私と手合わせする?」

S・A「いややめとく。大体護衛対象と戦うガードマンなんかこの世にいない。」

T・O・・「先駆者は素晴らしいんだよ～。」

それが正しいとは限らない。

S・A「・・・消えろグラム。さあ準備しろよ行こうぜ学校。」

T・O・・「もー出来るよ～。君がグラムに見蕩れてたんでしょうぬけるなー。」

「ぬけるなー。」

はいはい。

今日も学校に行くべく玄関の扉を開けた。
なにも間違つちゃいないはずだったのに。

俺は死んだ。

S・A「・・・。」

OZ「随分早い帰省だなS・A。」

S・A「ははは厭味がOZ。どうせ見てたんだろうが。」

OZ「あればベレト。P4・D1が召喚した超上級魔神だ。お前では田の前に出ただけで魂が消し炭になる。」

ああその通りだった。

玄関を開け、奴の姿を見た瞬間痛みは感じず、魂が燃えるのを感じた。

S・A「で、気づいたら廻り所に戻ってきたわけだ。」

OZ「せっかくの魂補充が2になつてしまつたな情けない。特例だ、直ぐに帰してやる。まだベレトは居るようだから少しの間籠にしておいてやる。さつとと行け。」

S・A「は? ちょっとま

」

玄関に戻ってきた。

この間約3秒。

本来なら拠り所で手続きをしなければ、いくら魂補充があつても戻ることは出来ない。

ま、今回は特例つてことでこんなに早く戻れたんだけど。
臍体くびたいなので妙には見えていないが。

T・O・・・「あんたねーいきなりなによ全く~。」

ベレト「儂とて暇ではない。」

T・O・・・「はー? 意味分かんなーいんだけど。」

ベレト「酔狂で来たわけではないと言つておるのだ。儂に玄関の前で待つ趣味はない。となれば理由は一つ。小僧、貴様の胸に聞け。そこまで言つとベレトという悪魔は霧の様に消えていった。」

T・O・・・「ん~? 帰つてきてるの左宇君?」

S・A「おひ。」

ベレトが消えた1秒後に臍の効果が消えた。

T・O・・・「昨日は確か~なにやつてたんだつけ?」

S・A「あー···。」

思い返してみる。

S・A「咎人を一人殺つたのは覚えてるよな?」

T・O・・・「うん。序でに人助けもねーお節介ねー。そのせいで私のアイス溶けちゃつたね~。」

S・A「···それについてはすまんと思ってる。」

昨夜、コンビニにお使いに行つた帰りに人の悲鳴を聞いた。
そうだな、妙は恐らく気づいても気づかず帰るだろう。

アイスを買う理由として挙げられるのが“暑い”だ。

暑いということはアイスが溶けやすいことを意味する。

なら悲鳴などに構つてゐる暇はないのである、というのは妙の持論

だ。

俺は気になつたので見に行つた。

無論アイスが溶ける可能性など考慮にいれていない。

何故なら俺のアイスではないからだ。

悲鳴があがつた方を目指し路地裏に入ると、サバイバルナイフを持つた男と腰を抜かしへたり込む男が視界に入った。

へ男「た、たたた助けてくれ！」

ナ男「頼む！助けてくれ誰だか知らんが！」

S・A「は？隨分特殊なケースだな。」

腰抜かし男が俺に対し助けを乞うのは分かる。

多分ナイフ男に襲われていたんだろうからな。

ただナイフ男も助けを求めるとはおかしな話だ。

S・A「んで、どっちを助けりやいいんだ？」

ま、助けるとすりや腰抜かし男だな。

ナイフ男は『通り魔』に『殺人』をやつている。

助ける義理はない。

へ男「あああああれ！あれだよあれ！」

S・A「あれ？」

腰抜かし男が指す方を見ると・・・。

S・A「召喚体みたいだがこれは・・・どつかで見たような・・・

」

思い出せんが、まあいいや。

“ 我は成す我を成す”。

S・A「Create剣。よつ。」

犬みたいな召喚体に剣を投げつけてやる。

逃げることなく剣に当たり召喚体は消えていった。

S・A「・・・しかしあんなもん怖くもなんともないだろ？」

へ男「奥にでかいのが居たんだよ・・・。それよりあんた今のは・・・？」

ナ男「へ、へへへ。なんだつていい。俺を見たからには生かして帰

しは 「

S・A 「アホみたいな文句言つてんじゃねーよ。ほれ腰抜かし男、さつさと行きな。」

ヘ男 「へ？あ、ああビリも？」

ナ男 「え？お、おいちょっと！」

S・A 「はい待つた似非殺し屋。お前は罪を償つていけ。」

ナ男 「は？意味がつ！？」

取りあえずナイフ男の腹に蹴りを入れる。

ナ男 「ぐ、あ・・・！」

S・A 「はい」めんよ。悪いのはお前だ。好きな神さんを思い浮かべな。」

・・・つて感じだつたな。

S・A 「それ以降のことはお前も知つてるだろ？」

T・O 「ん、もしかしてさ、その呪喚体のおでこに“ペ”つて書いてなかつた？」

ペ、だと？

んー・・・あ。

『時間を見な今は13時13分この世で一番悪い時間だ。』

そう言つて奴が召喚した無数の犬つころ。

その額に・・・。

S・A 「・・・成る程繫がつた気がする。」

学校に行つたら問いただしてやる。

P4・D1 「お前が悪いんだぜ？」

E2・D1 「僕らの邪魔をしたんだから。」

S・A 「だからって殺すか普通？ 昨日までの和気藹々とした関係はなんだつたんだ。」

P4・D1 「力の誇示は時に必要だそれが例え友人関係にある者に對してもな。」

E2・D1 「それに僕らの力を見られて幸運じやないか魂一つでなら安いもんだ。」

P4・D1 「ベレトを使役するのだって樂じやないんだ。」

E2・D1 「ホント感謝してほしくらいだよ。」

こいつらはまあ・・・。

S・A 「もういい分かった。」

P4・D1 「大体お前が邪魔しなきゃ良かつたんだよ。」

E2・D1 「“ワイルドハント”の一体くらい倒すのは構わない痛くも痒くもないからでも狩りの邪魔はダメだ。」

いつの間にか俺に対する説教になつてゐるし。

べらべら出てくる言葉を聞き流しながら窓の外を見る。

・・・そう、昨日の犬にも、ペルソナの出した犬にも間抜けな“ペ”が踊つていた。

S・A 「・・・あいつもつくづく律儀な奴だな。」

T・O 「ホントね～もう気持ち悪いレベルよ。」

また“ストップ”だ。

昼飯時になると必ずある奴が襲撃にくる。

なんというかもう構つてほしくて來てるんじゃないかも思える。

S・A 「・・・。」

T・O 「来ないわね～。」

屋上に居るのは分かつてはすだが・・・。

「が・・・は・・・！」

S・A 「今のは、聞こえたか？」

「あ、おいちよつと待てよ！“我は成す我を成す”」。

屋上から飛び降り校庭を目指す。

二二〇

校庭に転がつていそ

「國際二廿全體ハニカム、ハワノニ

「ブリグンヒルトとジークフリート、それにエーネ

斬られ血が溢れている。

「あんたが死ぬつぬ。」

S・A「で、誰に殺られたんだ?」

復讐なんとしてやうが狂うた奴を特定しておくのは大切のことだ

• < • • • •

侍？

娘は心当たるが、
「放題明日」。

・・・」うう時は知らな

「……で、それはどんな奴だ？」

和モ語しくは知らぬが如きとこの生機の三生三死

S
・A「そんな身近に居たのか。
—

いすぎるから。」

「アーニー、君はなんで朝られたんだ?」

卷之三

SA いや理由を聞いたんだが。

E・NE「ふ、そつちか・・・。前に拠り所で会つてな、その時殺

られたんで仕返しを・・・と思つたんだがこの様だ・・・。」

T・O・・「馬鹿ね〜。私に勝てないのにD・W/-に勝てるわけ

ないじやん。」

E・NE「・・・そのようだ。ぐ、げは〜。」

苦しそうではあるが死ぬほどではないらしい。

何故どぎめを刺さなかつたのだろうか。

T・O・・「あいつは魂補充が1万以上あるのよ。それに武器は完

ストしてるのね〜。」

つまり飽和してるつてことかうらやましい。

E・NE「・・・ん? ああ忘れてた。戻れジークフリート、ブリュ

ンビルデ。」

二つの召喚体は消えていった。

E・NE「しかし災難だ・・・。この短期間で三度も死ぬとは。おまけにグラムとジークフリートのレベルはリセットされるし・・・。ああクソ! ついてない・・・。」

S・A『おいおいなんか苦労話が始まりそうなんだが。』

T・O・・「ホントね〜鬱陶しい。」

・・・こいつはまあ人を労る気持ちがないのね。
せめて心中で言えばいいものを。

T・O・・「ふん、ついでだから死になさいなE・NE。『ボスディア・ラ・グロアアディ』。『我は成す我を成す』、『グール・ジフ・リートシズク』。」

E・NE「大体なんで俺ばつか・・・なにしてるんだ? いや、待て
なにをさせようとしている! ?」

T・O・・「え? 言うなれば殺人かな〜? 殺つていいよ〜ジークち
ゃーん。」

ジ「御意。出来れば呼び方は改めていただきたいですがね。」

E・NE「また死ぬのかよ・・・。」

『愁傷様。』

血を見たいわけではないので校舎に向かって歩きはじめる。
スパンという気持ちいい音が聞こえた、そんな気がする。
数秒後世界に色が戻り喧騒も帰ってきた。
T・O・・「・・・詰まらない人。」

1（前書き）

獵奇嗜好。

いわゆる獵奇殺人が好きな奴。

なぜそんな捩じ曲がった嗜好を持つようになったのか。

分からぬし、言つてしまえばどうでもいい。

ただ、それを見るのは相当ムカつく。

何故かと聞かれても分かりはしない。

・・・ 同族嫌悪という言葉をこれ程身に感じる存在はそういうだ
ろう。

殺人の行く末が、実は同族嫌悪の成れの果てだなんて普通は考えな
い。

けれど考えてみれば分かる。

人間の同族は人間、嫌悪し殺すのだからやはりそれは、同族嫌悪な
のである。

「ま、待てよ！いや待てください……。」

悪男「あ？ んだよてめえ？」

「あ、あのですね、死んでくれませんか？」

悪男「……ふ、はははははいきなりなに言つたかと思つたら。てめえこそ殺されてえのか？ あ？」

「ひ！？ あ、いやその……。」

「……なんじやありや。」

氣弱な方はワレラみたいだが……なんであんなにビビつてるんだ？
悪男が犯した罪は……『竊盜』無数、『強姦』7回、『引つたり』17回、『恐喝』無数……。

肩だな即刻死ね。

というかさつさと殺つちまえよ氣弱め。

「え、えーっと……く、Create劍！」

悪男「うおー？ 刀出てきたしやべー。なにそれマジック？」「ちなみに氣弱が出したのは両刃の剣であり刀じゃない。ん・・・ 悪男も腰からなにか抜きやがった。あれはサバイバルナイフだな。こいつはつぐづぐ肩のようだ。」

悪男「へつへへ。どうよこれからちょいといつしょ？ あんたのダサ刀とはえらい違いよ分かる？ これモノホンね。切れるよ痛いよ？」
どうしてああも頭の悪そうな話し方しか出来ないんだろうか。
見していく不憫になつてきた。

「な、なめるなよ……！ うわああああ！」

悪男「は？ え、ちょつ！？」

氣弱がブンブン剣を振りながら悪男に突進した。
しかしどうだ。

悪男「あははははははは！」行くんだよ……。」

・・・田を駆つたまま突進とはある意味勇者だな。

悪男「おらっ！」

「いつ・・・あ切られた・・・！？」

あーあー・・・。

いくらなんでも酷すぎる。

悪男「へへへ。これくらいで許しといへやるよ。おら財布よこせ。」

S・A「許したんじやないのかよ肩。」

悪男「・・・ん？・・・は？」

S・A「ふん。なに死にかけの金魚みたいに口をパクパクしてやがるんだ氣色悪い。」

悪男「は・・・？いや、なんだ、お前誰？」

S・A「セイの氣弱の変わりにお前を殺しに来たんだよ肩。」

悪男「・・・ふ、マジで言つてんのそれ？だとしたら超うけるんだけど。つうかせ、てめえ俺より年下だな？口の利き方知らねえのか？」

？あ？」

S・A「とことん馬鹿だなお前。」

悪男「あ？んだとコラア！」

「き、君！」

S・A「・・・君つて俺？」

「そうだ。は、早く逃げなさい。」

こいつはなにを言つているんだ。

せっかく助けに入つてやつたのに逃げろとせーれ如何に。

S・A「アホだな俺はあんたと同類だつての。」

「同類・・・どどど同類、だつて？」

S・A「ああそうだ。しかもあんたよりは強いな。“ベルンズ・ニ・グリング”。」

どうせなら経験値を稼いだ方がいいよな。

悪男「んだよてめえもマジック使うのかよ。超赤いなんだそれ。」

S・A「よつ。」

取りあえずナイフを弾き飛ばしてやる。

悪男「な！？てめつ！」

S・A「喧しい黙れ。好きな神さんを思い浮かべる。」

悪男「はあ？なにいつ」

グラムを振るい一気に首を落とした。

「ひつ！？」

胴体がその場で倒れ、切り離された頭部は氣弱の方に転がつていつた。

S・A「あばよ悪男。」

指をパチンと鳴らしてやると悪男の体は灰になり消えた。

S・A「・・・さて、立てるか？」

未だにへたり込んでいる氣弱に手を伸ばしてやる。

「え、あ、ありがとう・・・。」

S・A「・・・あんたの名前は？」

E・C「こん、近藤栄治こんどう えいじです。」

S・A「俺は阿部左宇。何時ワレラになつたんだ？つと、こんな路地裏で立ち話なんて詰まらんな。何処か適当に茶店にでも行け。」

よく考えれば俺は、いや考えなくとも相当なんだろう。

S・A「んじやま改めて、阿部左宇だよろしく。」

E・C「あえつと、近藤栄治ですよ、よろしく。」

久しぶりに握手なんてしたな。

S・A「それで、あんたはなにをやつてワレラになつたんだ？ああ、聞いといてなんだが答えたくないことは答えないといい。」

E・C「あ、いえ。助けられたんですから。えーっとですね、私は生前医者をやつしていました。犯した罪は『見殺し』。救急医療の場で働いていた時、5人の患者が一度に運び込まれた時がありました。近くの工場で事故が起きましたね、一人は右腕単純骨折。後の4人は複雑骨折、内臓破裂など重傷。単純骨折の患者は他に任せ、4人

の治療に専念しておりました。・・・まあ結果から言つてしまえば最初の1人だけ、死亡しました。私の診察ミスでね。」

S・A「・・・。」

E・C「それで随分責められましてね、贖罪のつもりで・・・。」
自殺、か。

S・A「成る程。」

E・C「正直気乗りしませんでしたけどね。私に殺しなんて・・・。」

S・A「さつきのを見れば大体分かるがな。後悔してるのか?」

E・C「いえ・・・。これが罪滅ぼしになるなら、と思つてします。」

罪滅ぼしね。

S・A「しかしあのがま様じやな。」

E・C「慣れなければ、とは思うんですけどね。」

S・A「何度かやつてはいるのか?」

E・C「あ、いえ大しては・・・。」

・・・。

S・A「そうか。まあまた会つたらようしく。」

E・C「あ、はい今日はありがとうございました。」

コーヒー代計500円をカウンターに置き、俺は喫茶店を後にした。
歪な視線を背に受けながら。

T・O「お人好しね。」

S・A「まあそう言つなよ。俺の経験値になつたんだからさ。」

T・O「まーそーかもしないけど。E・Cだけ?最近來た
ワレラにそんな奴いたかしら。」

S・A「いちいち確認してんのか?」

T・O「ONの奴が送つてくるのよ。役に立つちや立つん

だけどね。」

・・・なんでこいつは

T・O・・・「こんなに特別扱いされてるか？私が特別だからだよ。こんなによくある話よ。」

S・A「特別？お前の特性についてか？」

T・O・・・「へー鋭いね。その通りだけ教えてはあげないよ。」

S・A「誰も教えるとは言つてないだろ。そんなに踏み込む気はない。」

T・O・・・「そ。いい心掛けね。E・Cとかいうのにもあまり踏み込まないほうがいいよ。これは忠告。」

S・A「あいよ。」

・・・これまた酷い殺され方だな。
転がっている死体は咎人が3人。

S・A「それにワレラが一人、ね。」

なんだろうか、俺はこういうことに遭遇する確率が高い気がする。街を練り歩いているからというのもあるし、路地裏とかそういう所を好んで歩くから確率が上がるんだろうけど。

どうやら殺した直後らしい。

出なければ消えているだろうからなどちらの死体も。

つまり、ついさっきまでここに殺した奴が居たってわけだが・・・。指は一本残らず切り落とされ、右足を斬られ、左目が割り貫かれている。

ワレラもそうやって殺されている。

相当な手練れか、ただの獵奇好きか。
どちらにしてもおかしい奴に違いない。
バシュという音と共に死体が消える。

S・A『妙。』

T・O・・『なーにー?』

S・A『前言つてた轍醍醐、だつけか。そいつに猶奇嗜好はあるか?』

T・O・・『んにやー。あの人はねー他人を辱めたりしないよ。魂の尊厳を誰より重んじるからね。』

S・A『へえ。じゃあそういう奴に心当たりは?』

T・O・・『さーねー。私そんなこといちいちきにしにやーから。それより、今日は零の日なんだよ~?早く帰つてきてよ~。』

S・A『あーはいはい分かつた。』

・・・ん。

これは・・・。

男「く・・・!」

S・A「悪いが、いや悪くもなんともないか。因果応報、支払う時が回つてきただけだ。『ベルンズ・ニー・グリング』。」

男「や、やめてくれ・・・!」

S・A「好きな神さんを、ツ!」

男「がつ!?あ・・・。」

背後からの投擲。

目の前の男の喉には刃物。

スカルペル、ランセット。

日本ではメスと呼ばれる医療用刃物だ。

それは俺の背後から投げられ、男の喉に突き刺さった。

S・A「・・・何しやがるE・C。」

E・C「IJの前の恩返し、のつもりだったんだが、気に食わなかつたか?」

S・A「・・・。」

「ああ、この態度？俺の特性は『猫被り』。相手の動かぬ優位を切り崩す楽しみは本性を隠さなきや楽しめない。」

の動かぬ優

S・A「成る程。用は済んだろこいつを殺してさつさと失せろ。」
三・「止めは列す。」
二・「止めは列す。」

カツカツとE
・Cが寄つて来る。

四庫全書

三 男

・Cが持つメスが男の手元に運ばれていく。

「先ずは、親指。」

・ A 「な！？」

・Cがいきなり吐き出した。

次人差し指

中指、薬指と次々切つっていく。

その度にE・Cはえすいでいる。

王：「うまあ、まあ……なんだ……ッ！」

男「が・・・あ・・・。」

既に男は絶叫する力を失っている様だ。

失禁もして、いる様だ。

S · A 「 · · · 何故そこまでやる。お前もあまり良い気がしていな

い様だが

「好きだからにッ！決まって……おえつ……！」

ほど。

左目が視神経から断絶され地面に落ちる。

男はピクピク動いているがもう意識がないらしい。

E・C「は、は、うおえ！ げぼ・・・。せ、脊髄反射・・・。」

S・A「・・・醜い思考だ。」

E・C「なんとでも言え・・・！ ふ、ふふふははは。こいつはもういい。“千刃の谷”・・・。」

ズドドドド。

アスファルトの埃が散る。

視界が晴れた時、男の体は消え、E・Cの手にはグロアディが握られていた。

S・A「20・・・。」

E・C「そうだ。お前のグラムは1～5らしいな。」

S・A「だつたらどうした。」

E・C「分かるだろ。勝ち目がないことくらい。」

S・A「・・・『猫被り』だつたかお前の特性。」

E・C「そうだが、それがなんだ？」

S・A「いやなんでもない。お前はここでリタイアしろ下衆。」

S・A「・・・ふー。」

T・O「あー！ また煙草吸つてる～。」

S・A「いいじゃないか別に。」

消化しきつて疲れた。

E・Cの魂補充は3578あつた。

それだけの数をあれを使用して消せば疲労困憊するに決まってる。

“人の価値や尊厳なんて同族であれば無いに等しい。そうだろう君。責められたものではなかつたはずなのに、直接の原因を紡いだ奴が私を責めた。結果的にそれは私の死へと繋がつた。許すべきで

はない。
”

とかなんとかほざいて死んでいったなあいつ。
意味は分からなかつたし、どうでもいい。

ただ、あいつが歪んだ要因に触れた気はする。
ただ、それだけ。

人は醜く、それこそが人であると。

俺も歪まなければ生きてはいけないと。

膝を抱え泣く。

ただただ毎日を怯えて過ごした。

仕方ない。

敵わない対象からの暴力に対しやることなど、やれることがそれしかない。

でも飽きた。

殴られつづけたある日のこと、田が覚めるとそのまま黒い部屋だった。

私が目覚めるといつもは暗い部屋だったのに。

「やあ。見ていたよ。遂に来てしまったね。」

そこに居たおじさんは、拳で語りかけてくる私の憎む相手と違つて、優しく私を慈しむ様に話しかけてくれた。

「君は機会を得たんだ。君は正義の下に制裁を加えられる。」

憎む相手に対しても・・・?

「君はそれを優先しなければならない。まあ決める。」

・・・悩むことなんてない。

膝を抱え恐れ泣く日々にはもう飽きた。

私、やるよ。

殺る・・・。

T・O・・・「じゃあちよつち行つてくるね。」

S・A「本当に着いていかなくていいのか?」

T・O・・・「大丈夫だよ~今日は零の日じゃないんだし。心配性ね

」。

そいが君の良ことこりうです~」甘いんだね。

S・A「なんかあつたら呼んでくれ、直ぐに行く。」

T・O・・・「ホントに~?」

S・A「本当だ。ふあ、あーあ。お呼びが掛かるまで寝てるからよ。」

T・O・・・「はいはーい」解しました~。ほこじやーねー。」

S・A「いってら。」

バタン。

T・O・・・「魂の権限を私に。」

取りあえずBUILT化し近くの民家の屋根に飛び乗る。

今日は生憎の空模様。

今にも落ちしきそうな厚く灰色の雲が青を覆つていて。雨が降つて濡れても直ぐ乾かせるしどうでもいいけど。ひょいひょいと屋根から屋根へ、猫ちゃんみたく移動していく。猫が屋根の上を歩くか知らないけど。

T・O・・・「新しい子はどんな子猫ちゃんかしらね~うふふ。」楽しみね~。

「おい。」

T・O・・・「・・・。」

背後から掛けられた声に振り向くことなく寧ろスピードを早めてやる。

T・O・・・「ちよつと待て~!」

T・O・・・「待つわけないじゃない。君ばか~?」

「頼むから、待ってくれーなにも襲撃とか、そんなんじゃないからー。」

T・O・・・「・・・はあ。」

鬱陶しく。

E・NE「や、やつと止まつてくれたな・・・。」

T・O・・・「で、なんの用よさつたとして。」

E・NE「いやさ、ヤバい奴が現れたんじゃないかと思つてた。」

T・O・・・「・・・は?」

E・NE「お前が〇〇から新しくフレラになつた奴の情報を貰つてるのは知つてるんだぜ?」

T・O・・・「隠してないからね。」

E・NE「お前はそれに興味がない。」

T・O・・・「ち、回りくどい言い方してないでやつたと喋りなさいよ。急いでるんだから。」

E・NE「そう、それだ。お前一体そんなに急いで何処に行く?」

T・O・・・「あんたいつからストーキングナイトになつたの?」

E・NE「お前も話をばぐらかしてるだり。なら書いてやる。普段は興味を示さない新しいフレラを見に行くんだり? 話まるといふ、

そいつはヤバいくことなんぢゃないかと思つたんだ。」

T・O・・・「成る程死にたいのね。」

E・NE「わわつと待て待て! ちょっと気になつただけだつて! それに変な奴が現れたら詳細を知つておきたいもんだろ!」

T・O・・・「そーねー確かに。じゃあ着いてくる?」

ちゅうどいこじて馬だ。

E・NE「いいのか?」

T・O・・・「いーよ。たまにはサービスしてあげるー。」

街外れの団地。

ここのは6階、607号室に新しい子がいる。

昨日ワレラになつて、一番の目的をこの部屋で果たした。まだ警察も誰も気づいていないから静かなものだ。

ドアノブに手を掛けた。

鍵は掛かっていない、のがお約束でしょ」」」」」

T・O・・・「ほら壊して。」

E・NE「は？ なんで俺がはいやらさせていただきますみません。

T・O・・・「分かればいいのよ。」

E・NE「ち・・・。C r e a t e 剣・・・って壊していいのか？」

T・O・・・「いいよ。どうせ此処に住人は残らないし、警察はあんたを捕まえられないしね。」

E・NE「・・・まあいいか。は！」

一閃、扉は斜めに斬られ下半分が中に倒れ込んだ。

T・O・・・「はいはいお見事。ホント剣捌きだけは凄いよね。」

E・NE「なんか含みを感じるが褒め言葉として取つておこう。」

T・O・・・「じゃあその勢いで中に行つて。」

E・NE「任された。」

・・・ゴミが散らばつてゐるかとも思つたけど存外綺麗ね。

住んでいた奴が汚かつただけか。

狭つくるしいリビングを抜け、E・NEが引き戸を開けると畳の部屋だ・・・。

T・O・・・「あらら～悲惨ね。」

ここはの家主は包丁で胸を貫かれ絶命していた。

E・NE「つつてもよ、こいつは糞だつたわけだろ？ 因果応報つてわけだ可哀相とは思えんね。」

T・O・・・「右に同じよ。や、子猫ちゃんはどこかにやー？」

E・NE「ふ。T・O・・・よ。お前には洞察力が足りないようだな！」 うつ糞が住む部屋に閉じ込められる姫さん坊ちゃんはな、狸と同じで押し入れに住むと相場が決まつてんだよ！

T・O・・・「それ洞察力関係ないじゃん馬鹿死ね。」

E・NE「ひょっと…名前じゃなによな…？悪意しか感じられなかつたぞ！」

T・O…「嘘しこわね～。わざわざと開けなきよアホ。」

E・NE「…はよこしょつと…」

多分、E・NEは着いて来たのを後悔しただろ。
だって死んだから。

T・O…「ただいま～。」

S・A「おひおか…誰だその子？」

J・A5「おじやめします。」

T・O…「あー」の子今日から家の子。

S・A「は？」

J・A5「よろしくおねがいします。」

S・A「え、はよろしく…。」

制裁を受けた男とE・NEの死体を片付けた。

E・NEは私が片を付けてあげなきや終わってたわね。

T・O…「はーい着いといでー奈保ちゃん。」

J・A5「つんお姉ちゃん。」

とととと着いて来る。

ん～超キュート～。

S・A『おー一体なんなんだよ？』

T・O…『知りたい～？』

S・A『当たり前だらうが。』

T・O…『よくある話よ～。あの子はね、ジゴロから暴力を奮わ
れてたのよ。』

S・A『成る程。罪は『親殺し』ってとか。』

T・O…『んーん違つよ。ジゴロが死んだのは奈保ちゃんがワレ
ラになつた後だから。』

S・A『え? じゃあなたにをやつたんだ?』

T・O . . .『殺つたのは糞ジゴロよ。』

S・A『はあ?』

T・O . . .『それ以外に言ひりとはないわ。じゃ、ここから先は更なる乙女の園だから~ 駄子禁制。』

S・A『え? ちょっとま

』

バタン。

くいくい。

T・O . . .「ん~? なにかな奈保けやん?」

J・A5『ジゴロつて、なーに?』

T・O . . .「悪いねじわんのことよー。」

J・A5『悪い . . . ねじわん?』

おつと地雷かな。

J・A5『じらー?』

T・O . . .「なんでもないよ~。まあ此処が奈保けやんの部屋よー。」

』

S・A「で、どうすんだあの子?」

T・O . . .「わつをも言つたでしょ~ 今日から家の子よ。」

奈保ちゃんが寝てから4時間、リビングに集まりお茶を飲み飲み宇宙と話している。

S・A「いや家の子つて。あの子がワレワレで、親を殺して家に居られなくなつたつてのは分かる。けどここまで世話をやく必要はあるのか? 食べなくても死ない、眠らなくても死ない。それがワレラの売りだる。」

T・O . . .「あいらう以外と薄情ね左宇君。見た目は16、7つてと

ころだけど~ 中身は10歳の女の子なのよ?」

S・A . . .まあ此処はお前の家だし、お前に危害を加えなきゃ

それでいい。」

T・O・・・「大丈夫よ。災厄は、田の届く位置に困んでおくのが
頭良しよ。」

S・A「そういうもんかね。・・・災厄？」

風は虚ろ、空虚から悪いことは訪れる。

身近に置いておけば対応は簡単で、死ぬのも簡単。

災厄は最悪になる必然はない。

そのまま最上にするのが楽しいのよね。

「・・・そーいうもんよね私？」

1（前書き）

金があるのに万引きをやめられない。

何故か分かるか？

癖になるからだよそれが。

成功すると達成感を得る。

気づけなかつた店員に対し優越感を抱く。

それらは麻薬として作用し、万引きを依存の対象に進化させる。

何にでも言えることや。

活字が好きだから小説が好き。

面白いからゲームが好き。

爽快感があるからマラソンが好き。

野球が好き、サッカーが好き、サーフィンが好き、演奏が好き、歌うのが好き、万引きが好き、殺人が好き。

対象は違えどそれらは全て人にとって依存の対象だ。

私も依存しなきゃ生きていけない糞しょぼい人間の一人だ。

何かを殺すことに依存している、糞人間だ。

E・NE 「・・・。」

私の名前はE・NE。

本体の名前なんて語るに値しない。

呼ばれ方もどうでもいい。

最近、なんだかキャラが崩壊していると思われがちだが・・・。

本来俺は、真面目くさつた話し方が嫌いだ。

生きていた頃は快活が人になつたような奴だったからな俺は、やつていたことはあれだが。

ああ、こんなモノローグは必要ないな。

察しの通りこれは俺の話。

詰まらないし、これまた語るに値しない。

けれど俺にだつて酒を傾けながら独り言ちたい時がある。話半分で聞いてくれれば幸いだ。

S・A 「それで、何を手伝えばいいんだ?」

E・NE 「・・・まあ取りあえず、一服どうだ? いけるんだろうお前?」

S・A 「貰つとぐ。」

バチ、ジジジ・・・。

E・NE 「ふー。5年前俺は死んだ。」

S・A 「驚いた、大先輩だつたんだな。」

E・NE 「茶化すなよ。」

近くの山の展望台。

の屋根の上はとても見晴らしがいい。

こんな所で吸う煙草は普段の2倍美味く。

S・A「ん、ん、ん、ふはー！ うめー久しぶりに飲んだぜビール。」
ビールは普段の5倍美味しいし。

「ほれほれ日本酒に肴もよつけある。」

日本酒は普段の10倍、摘む肴は普段の15倍美味しい。

Ｓ・Ａ「展望台、の屋根の上で月見酒つてのも乙なもんだな。」

「だろ?此処は俺の取つて置きだつたんだが、お前は也ど

は違う。共有するに値する。

「そつか。甘んじて受けてしまひ。

何故かは分からぬ。

分からぬいが、こいつだけは信用出来る。

「香の葉は『裏』」が、心を読めないかいか。

そのせいで何人か死んだ。悪いことは悪つかつたが。

そのせいで何が死んだか悪いことに思わないで。
「ふー」つまり悪の用戯(うげ)だつたり。

「アーティストに悪の組織が付いてわけがない。」

人、な。一人ぞ才組織の中こ殺したハ双がハた。

「恨みもあつた。ただ俺は、そいつを殺す

やつにあたると金子を止めてしまつただけなんだのうな。そし

てそれはまだ出来ていない。

「成る程。つまりそいつを探すのを手伝えと。」

田：之田：を、ヒルヒルだ

かからお前交がうにうをいをいを接てが

田・乙田・ああ そして察しかへくたなが・・・

「アーリアの死は、必ずアーリアの手で止む。」

ITeになる。

S
·
A 「何故？」

正ニ「奴ま

以外になる資格がない。」

だから俺は獸を殺す。

S・A 「んぐんぐ。このスモークチーズなかなかイケるな。しかし、そりやあとんだとばつちりだな無関係のBUILT eからすりや。」

E・NE 「確かに。だが結局俺もお前も罪を犯し、ワレラになり重ねている。殺されても文句は言えん。そつだろ?」

S・A 「まあな。」

そうだ・・・だから俺はその日のために罪を重ねてきた。

E・NE 「それで、結局手伝うのか、それとも・・・。」

S・A 「承ろう。」

E・NE 「そうか。ありがとう。」

S・A 「アホかよ。感謝なんて見つけて殺した後にしろ。」

E・NE 「ふ、そつだな。まあ今日は無礼講つてことで飲み明かそう。」

大体何故なんだろうか。
ピチャ。

最初の対象はなんだつたか。

ピチャ、ビチャ。

まあなんでもいいか。

ピチャ、ピチャビチャ。

今日も今日、明日も変わらず同じ事しかしない。

ピチャ、ピチャビチャパタタタタ。

「・・・あー煩いなあ！」

ドン、バタリ。

単純に好きだからなのかもしれないが、なら何故・・・。

ジワ。

「・・・垂れるね。」

T · O · · · · 久しぶりに出たわね。」

S · A 「なにがだ?」

T · O · · 「え~知らないのー?殺人鬼よ殺人鬼~。ホントに知らないの?」

S · A 「知らん。」

T · O · · 「女の子ばつか殺す悪質な奴でね~、喉を軽く搔き切つた後逆さ吊りにするの。で出血死するまで眺めてるそ~よ鬼畜ね~。」

S · A 「···反吐が出そうな野郎だな。」

T · O · · 「ホントよ~。女の子を逆さ吊りにするなんて信じらんないわ~。」

S · A 「突っ込むのはそこか。···そいつ、相当罪を重ねてそうだな。なんで誰も殺さない?」

T · O · · 「理由があるからでしょ~よ~。たかが人間一人消さないってことはそういうことよ。」

S · A 「理由、か···。そいつについて分かつていることは?」

T · O · · 「男~どつかの組織に飼われてるつてくらいかね~。」

S · A 「組織ねえ。」

T · O · · 「なに隠してるの?」

S · A 「いやなに、男同士の約束だ。見逃してくれ。」

T · O · · 「そー。まあなんでもいいけどね~。死なないようにだけしなさい。」

S · A 「おう。」

E · N E 「···成る程昨日か。」

S · A 「取りあえず現場に行つてみるか?」

E・NE「ああ・・・。」

S・A「・・・ おい。」

E・NE「ああ。」

やつてしまつた。

また守れなかつた。

力を得たはずなのに・・・。

S・A「おい！」

E・NE「つと、なんだよ？」

S・A「大丈夫かよお前。魂抜けてんじやねえか？」

E・NE「は。んな馬鹿な。さつやと現場に行こい。」

S・A「・・・ おう。」

屋根を駆け街外れの波止場を目指す。

今回の殺害現場は倉庫。

なんでこの街に波止場があるんだか。

船が来たことなんて一度もないくせに。

どこかおかしいと感じる俺はおかしいんだろうか。

それこそちゅ

S・A「おい！」

E・NE「どわつ！？ いきなりなんだー！」

S・A「・・・ お前ちょっと抜けすぎだろ。」

E・NE「悪い。警察はどうだ？」

S・A「ばつちりいるが・・・。」

どうしたと言いかけて気づく。

E・NE「『横領』、『収賄』、『賭博』。この街の咎人に比べりや屁でもない罪だが・・・。」

S・A「問題なのはこれをやつた連中が秩序の一環を担つていると
いうことだ。」

E・NE「その通りだ。更に言つなら犯した罪を償つことなく他人
を裁こうなんて言語道断だ。」

S・A「ああ許されることじやない。鉄槌を下す。」

E・N E「だが殺す程じゃない。せいぜい骨折くらいだな。」

S・A「・・・公務執行妨害とかで引っ張られないか?」

E・N E「ワレラの間は人じゃ上手く視認出来ないから平氣だろ。殺意を向けない限りな。左の2人は任せる。右は俺が行く!」

S・A「オーケー。」

屋根から飛び出し刑事の背後に降り立つ。

刑事1「・・・?」

刑事2「どうした?」

刑事1「いやなんか誰かが後ろに来たような気がしたんだが・・・。」

E・N E「ふん。」

取りあえず刑事1の右腕を掴む。

刑事1「な!?だ、誰だおまうせやあああああ!?」

そのまま俯せで押し倒し右腕を折る。

刑事1「く、あああああ!?」

刑事2「・・・お、おいいきなりなんだ?」

殺意を向けていないから俺をうまく視認出来ていない刑事2の腹を蹴り上げる。

刑事2「が!?なんだ・・・お前・・・誰だ!?」

E・N E「答えるわけないだろ馬鹿。」

膝を正面から、踏み付ける様に蹴る。

ゴキヤ、という氣味の悪い音と共に刑事2の膝は曲がらない方向に曲がった。

刑事2「あ・・・ぐあわ・・・!?」

E・N E「良かつたな可動域が広まつて。」

S・A「気絶させろよ煩いから。」

後頭部を殴り気絶させていく。

E・N E「よし、じゃあ中に入ろ!。」

E・NE「・・・」

死体は逆さ吊りにされたままだった。

地面に垂れた血はカラカラに乾き、靴で擦ると簡単に剥がれていく。滴る血はもう無く、首筋の傷にも同じく乾いた血がこびりついている。

S・A「・・・首の傷以外に外傷が見当たらないな。打撲傷ビショロが擦過傷すら見当たらないってのはどういうことだ?」

E・NE「奴のポリシーだな。“傷は一つ、ただそれだけで人は死ぬ。なんて単純な生き物なんだろうか。”よく言つてた。」

S・A「はん。なかなか面白いな。」

脚を縛る縄を解き死体を下ろす。

・・・16、7といったところか。

E・NE「接天。火送り。安らかに眠れ。“火葬”。「ボツ。

S・A「燃やしちまつていいのか?警察は困りそうなんだけど。」

E・NE「いいんだよ。こんな姿、人に見られて気持ちがいいわけないんだから。」

・・・やはり証拠はなにもないか。

E・NE「鑑識がいなってことは刑事達は今来たといひつてことだな。いつそ全部焼き尽くしちまうか。」

S・A「確かにそれで・・・ん?」

E・NE「どうした?」

S・A「刑事達が来たばかりといつことは情報はまだ世に出回っていない。」

E・NE「・・・お前確かにO・O・に聞いたんだよな?」

S・A「ああ。一体なんで・・・。」

まさか・・・。

E・NE「・・・ま、取りあえず此処を燃やしちまおつ。話はそれからだ。」

T・O・・・「なーにーよ?」

E・N・E「答える。お前は昨日見たのか?」

倉庫を焼却後、T・O・・の家に来た。

T・O・・・「私が見たのは死体だけよ。行つたときにはもう犯人はいなかつたわ」これホント。」

S・A「妙はなんで倉庫なんかに行つたんだ? 波止場なんて用がなきゃ行かんだろ。」

T・O・・・「用があつたのよ。ペルソナじゃないけど私も召喚体であちこち見回つてんの。んでー昨日の夜ビルデが波止場に行つたのよ。」

E・N・E「自動操作か?」

T・O・・・「もちへ。束縛はするのもされるのもやなの。でも一つだけ命令があるの。街から外れようとするとフレラを発見したら追跡すること。」

S・A「何故?」

T・O・・・「そこまで教える必要はないよね? 私たち仲良くしてるので踏み込めるラインはあるってことを忘れないで。」

S・A「スマン。続けてくれ」

T・O・・・「それで、一人のフレラが波止場なんて間抜けな方に行つたからビルデは追っかけたのね。レベル低いから離れすぎで会話は出来ないけど、簡単な信号を送ることは出来るの。」

フレラを追つて・・・。

まさか奴は既に? 」

E・N・E「・・・ふむ。つまりお前のビルデから信号が送られてきたのか?」

T・O・・・「そ。危険信号がね。だから私は召喚体キャンセルしようと思ったのよ。殺されると勿体なかつたから。」

S・A「出来なかつたのか？」

T・O「ええ。相手に捕まるか、攻撃を受けるとキャンセル出来ないからね。だから仕方なく波止場に行つたのよ。驚いたわ。だつてあの子が犠牲になつてたんだから。」

E・NE「あの子？犠牲者と知り合いなのか。」

T・O「知り合いじゃないけど知つてる。だつてヒルデが追つたワレラがその子なんだもん。」

S・A「成る程。ん？だつたらヒルデが犯人の顔を見た可能性があるんじや？」

T・O「その子の特製は『忘却』^{リスペ}と『植付』^{サニアダ}。特定の記憶を排除し、特定の記憶を上書きする。ヒルデの記憶は、お花畠を駆け回つてたことになつてるわ。」

じやあ結局情報なしか・・・。

S・A「その子の魂補充は？」

T・O「分かんなーい。ついでに名前も分かんないのよね。」

E・NE「ち、火葬するんじやなかつた。」

S・A「え？」

E・NE「ん？どうした？」

S・A「火葬してやつたのか？なかなか気が利くな。」

んんん？

話が噛み合つてない。

E・NE「だつてお前・・・いやちよつと待て、倉庫は燃やしたよな？」

S・A「なんで燃やしちまうんだよ。・・・ん？まさか・・・これはもしかして。」

E・NE「ああ多分。」

T・O「生きてたみたいねその子。」

そしてまた波止場へ。

倉庫は灰と化していた。

S・A「・・・燃えてるな。」

E・NE「ということは俺の記憶が正しかったわけか。」

警察が大量にいるので屋根の上から見ているが、腕や脚にギプスをはめた刑事が4人いる。

E・NE「仕事熱心、言いかえりやワーカホリックな奴らだ。」

S・A「だな。俺達が折ったんだからなんとも言えないが。」

E・NE「そうなのか？俺達ってT・O・・・と？」

S・A「・・・成る程。お前はそれを忘れているわけか。」

E・NE「と、いうことは俺とお前がやったんだな？」

S・A「ああそうだ。」

・・・記憶を無くす箇所が違うことになにか理由はあるんだろうか。E・NE「まあいい。お互いの記憶に齟齬があるつてことがちゃんと認識出来たんだからな。」

S・A「そして齟齬があるつてことはつまり、変な言い方だがあの死体は生きていた。」

E・NE「ああ。そして火葬された振りをした。俺達を見張つている可能性もなくはない。」

今のところ不快な視線などは感じないが。

E・NE「・・・今更だがスマンな。こんなことに巻き込んでしまつて。」

S・A「恩はなんのために存在するか知ってるか？」

E・NE「・・・あ？」

S・A「売つて、倍にして返してもうつためさ。」

E・NE「実益主義者か良い心掛けだ。そして俺は恩を買い倍で返すことで死の回数を減らせるわけだ。命より高いってもんがないのは本當だな。」

S・A「魂何個も持つてお前が言つても説得力ないけどな。」

E・NE「ははは確かに……」

なんだ……?

S・A「どうした?」

男……。

男を探す?

本当に男だったか?

E・NE「……ダメだ一旦帰らつ。どうせ此処に居たといいで取
穫は無いし。」

S・A「……? そうだな。」

結局俺にはなにも出来ない。

今から幾年か、“全てを束縛する国”が崩壊するまで俺はそいつの

招待を掴めなかつた。

いや、その後も掴めていない。

そしてそのために魂が循環した数は8000以上だつた。

プロローグ（前書き）

集団心理。

弱かろうが強かろうが、群れれば群れる程人間の増長を呼ぶ。
集団行動が大事なのは分かる。
でなければ規律などなんの意味も無くなるからだ。
ま、わけの分からない規律であれば即座に切り捨てるまでだ。
心理と行動の間に境界を見いだせない奴は殺してやる。

プロローグ

D・W・ - 「 」

この世に生まれ落ちて八百数年。

今まで静かに世を眺めてきた。

移ろ移ろい行く世は、時に美しさに溺れ、時に醜怪さに身を任せていた。

そして今日の前で行われている、この世で最も愚行と呼べる集団心理に依る行動。

許せるものではない。

E・01 「ひひひ。さあ来いやお嬢さん！」

E・02 「そ、そうだよ。これ、こ、これみ、見えるだろ？刀だひよ、よ刀・・・。」

E・03 「ぬははお主嗜みすぎよ。」

女「やめて・・・来ないで・・・。」

Createで剣ではなく刀を創りだしている辺りは褒めようもある。

刀「そ至高の武器なのだから。

D・W・ - 「だが貴様ら下郎が持つてよい物ではない。」

E・02 「へや・・・？」だだだだつれだよおあんた！」

D・W・ - 「男児がそう簡単に狼狽えるな見苦しい。」

E・01 「あーん？てめえ誰だコラ？」

ナイフを持った男がこちらにやって来る。

E・01 「おいおいおい。てめえなんだ？あれか？正義の味方ぶつてんの？んん？この女助けて、ええつと・・・なんだつけ・・・？」

E・03 「ぬははちちくりあう氣だろぬははは。」

E・01 「そう！それそれ！あひやひやひやひや。分かつてんのかクソガキ？俺達が一体誰なのか知つてんのか～？」

・・・どうやら全員 B U I T らしい。」

D . W / - 「 . . . E . N E を呼んでやるうか。」

E . 0 1 「あ？ なんだつて？」

いや、もうダメだな。

スパツ。

E . 0 1 「え？」

D . W / - 「貴様達もフレラだろ？ ふざけた輩もいるもんだな。
全く、ONの奴は何を考えているのか。」

E . 0 1 「は？ おい。ねえ。俺の右腕は？」

E . 0 2 「あえ・・・？」

E . 0 3 「そこに落ちてぬははは・・・。」

E . 0 1 「ツ！ ？ いつてえ！ ？」

ナイフ男の右腕から血が噴き出す。

女は既に意識を向けられていないのでなにが起きているか分からな
いようだ。

D . W / - 「安心せい。痛みはそれまでだ。『千刃の谷』祢々切丸
”。

男3人「へ？」

祢々切丸が天空より降り注ぐ。

E . 0 1 「が！ ？ ぬわたあなまやなあ！ ？」

E . 0 2 「ひいいいいいいあああ～」ぼつー

E . 0 3 「ぬはははぐたなばな！ ？」

D . W / - 「消えろ下郎共。」

男2と3が消えていく。

E . 0 1 「あ・・・がが・・・。て、てめえの顔・・・覚えたぞ・・

・。」

D . W / - 「喧しい。さつさと失せろ。」

灰になり消えていった。

D . W / - 「・・・さて。」

ん？

D . W / - 「成る程。彼女もそうであったか。」

屋根から屋根へ飛び移り離れていく女の後ろ姿が見える。
まあいいか。

D . W / - 「済まなかつたな祢々。下衆の血で汚してしまつて。
さ、明日も学問に勤しまねばならん。
早く帰つて寝るとしよう。

最初の鳥合

先生「であるからしてこいつは
こいつとは随分上から目線の奴だなこの男。」

そもそも学問の場において“こいつ”など使いに能わない。
ふざけた野郎だ。

大体この教科書に書いてあることは事実となんら一致しない。
可哀相なあいつである。

先生「おいこいら轍！聞いてんのか？」

D・W／「聞いている。さつさと続ける。」

先生「・・・てめえ後で生徒指導室に来いや。」

D・W／「構わんが？」

先生「ち・・・クソガキが・・・・・授業を続ける。」

生徒1「おいおい大丈夫かよ醍醐。」

D・W／「ああ。心配ない。それよりお前は授業をちゃんと聞いておいた方がいいぞ。この男の授業以外をな。」

生徒1「ははは違ひないや。」

こいつは良い奴だ。

直感的に良い奴の役とその逆が世の中にはいる。

前者の最たるが俺の右隣りの男子生徒。

後者の最たるが先程の非教職者だ。

学生という身分に就いたからにはある程度の束縛に従うのは仕方あるまい。

どうせ大したことではないのだし。

しかし私の信念を曲げようとすれば、例え誰であろうと切り捨てる
までだ。

キンコンカンコン。

先生「ではこれで授業を終」とする。轍、生徒指導室で待ってるか
らちゃんと来いよ？」

D・W／ - 「分かつていてる。」

非教職者は引き戸を乱暴に閉め教室を後にした。

生徒1 「つたくよ／＼たまんねえよな。」

生徒2 「ホントよ。ああやつて偉ぶつたり大きい音を出して脅そうなんて、えーと・・・。」

D・W／ - 「自己顯示欲が強く、可哀相な男だな。」

生徒2 「そうそうそんな感じ。」

この子も良い役の最たるだな。

D・W／ - 「では行くとするか。」

生徒1 「がんばれ醍醐。」

生徒2 「がんばー。」

ガラツ。

D・W／ - 「轍醍醐、入る。」

先生「ちゃんと来たな。その行動だけは褒めてやる。」

回る椅子に座りキーキー音を發ててている。

D・W／ - 「それで何の用だ。」

先生「ち・・・てめえ年上に対する口のききかた知らねえのか？」

ふ、真実を言えれば私の方が相當年上なのだが。

D・W／ - 「では、何の用でしようか歴史の教師。」

先生「それも嘗めてるだろ・・・。まあいい。お前、俺の授業に何か文句あんのか？」

D・W／ - 「いいえなにも。あるとすれば今だぞ下郎。」

おつとしまつたつい本音が出てしまった。

先生「てめ・・・！今なんて言いやがった『コラア！』

D・W／ - 「お前本当に教師か？この国の教育は根本から腐つてい

る様だな嘆かわしい限りだ。」

・・・もうダメだ。

D · W / - 「抜けば玉散る氷の刃。
“ 村雨 ”^{むらさめ} 。

先生「な・・・お前・・・！」

卷之二

先生「す、全ての人は肉塊にぐわが！？」

取りあえず右手を枕雨で貫通机に固定してせる

D . W / - 「全く・・・先田の小物と言ひなんだこの体たらくは。」

河故の妹が下衆がアーティストになつてゐるのだ。

先生「ぐ・・・放せよてめえくつ・・・は・・・!」

D
· W / - ' 何故貴様

先生 わ 悪 し た

刺さった刃を手首の方へ倒していく。

先生は

先生「さ、殺人だ。だが勘違いするな！やられたから殺つただけだ

[

で、複讐は正式な権利だ。むしろ施行したことは夸つていい。

先生「へ、へへひひひふ。
だ、だろ？」

口…W…たが崇高な輪廻は乗る程の者ではない」

のねあああああ前だ？

D · W / - 「構わないさ。一個人、更に言うなら学生程度が出来な

いじへりて殺し 淫化しなければ倅が捕まる」とはない
取りあえず村雨を引き抜く。

先生「いつつ！？」

D・W／ - 「ちょうど貴様の他には誰もいないしな。」

村雨を歸し、代わりに名もない刀を取り出す。

D・W／ - 「ただ、貴様は村雨や祢々で斬るに値しない。」

先生「やめる・・・！」

D・W／ - 「ふん。男児ならば覚悟を決める。たまには良いだらう

細かに唱えるのも。」

先生「く・・・！來い流星群。貫き、拘束しろ・・・。」

D・W／ - 「ほう。その心意気は誇れ。來い流星群。貫き、拘束し

る。」

意外と骨が・・・。

D・W／ - 「ん？」

先生「隙あり！“千刃の谷”！」

D・W／ - 「・・・。」

狩りをするなら量で攻める

ジリリリリリリリリリ！

何かの警報機が鐘を鳴らし、天井からスプリンクラーが水を撒き散らす。

非教職者の放つた“千刃の谷”を塵の如くいなし、幾十もの刃で以て非教職者を貫いた。

壁は抉られ見晴らしがよくなっている。

D・W／ - 「貴様もか？いやお前は・・・昨日の女か。」

女「あら。よく分かつたわね。」

“千刃の谷”を放つ直前に気づいた視線は、入り口に立つ女からのモノだった。

D・W／ - 「なにか用か？」

女「いーえーなにもーないよ？昨日のお礼を言おうと思つて。」

D・W／ - 「・・・貴様の言つお礼は、お礼参りのことと意味するのか？」

教室にぞろぞろと人が入つてくる。

よく見れば昨日殺した奴らもいた。

女「いーえーお礼だよ？邪魔してくれたことに対するね。」

E・01「ここのがキだつたのかクソ野郎。」

E・02「ひひ、こふ。きよ、今日は殺す今日は殺す。」

E・03「ぬはははこんだけ数いりや余裕つしょ。」

教室に入つてきたのは3人。

どうやら背後にもう少し控えているらしい。

D・W／ - 「・・・ほう。外で悲鳴をあげている脆弱な男共が役に立つと？」

女「なんですつて？」

E・015「・・・は、は、は、たたた助け。」

「喧しい。」

血をだらだらと流しながら入ってきた男が、鋭い一閃の下、体を縦に真つ二つに切り裂かれた。

女「な・・・！誰よあんた！」

S・A「S・Aとでも呼んでくれ。全く、真昼間から何事かと思えば、えーと・・・。」

D・W/-「轍醍醐、だ。」

S・A「ああそうだつた。妙とかペルソナからひりつと聞いたよ。よろしく。」

D・W/-「ひらりひらりとよろしく。」

・・・珍しいな。

こいつはどちらの役か見当がつかない。

E・O・I「お、おいどうすんだよこれ・・・。」

女「ち・・・！引くわよー！」

女は残りの集団を引き連れ、私が空けた穴から飛び降りていった。

S・A「ふん。面白みのない捨て台詞だな。」

D・W/-「全くだ。ところで阿部左宇、何をしに来たのだ？他のワレラは我関せず焉のよつだが。」

S・A「単純に煩かつたから、てのじやダメか？」

D・W/-「では次の質問だ。この“ストップ”は誰が使用したのだ？」

女が姿を見て直ぐに“ストップ”がかけられた。

女が去つた今も持続しているといつことはあの集団がかけた訳ではないだろう。

S・A「妙がかけてくれたんだよ。理由は“警報機が喧しいから～”らしいけどな。」

D・W/-「ふ、成る程。T・O・・らしい理由だ。」

S・A「俺からも質問いいかな。奴ら何者だ？集団行動するワレラなんているんだな。」

D・W/-「あれは集団行動などというモノではない。ただの集団心理だ。あの女に釣られているのだよ奴らは。何者かは知らない。」

S・A「そつか。俺が言つのもなんだが、随分程度の低い奴らだったな。」

D・W／「全面的に同意だ。」

しかし心配には及ばない。

なぜなら奴らは私が駆逐するからだ。

S・A「ん・・・分かつた。そろそろ“ストップ”を切るそうだ。それ、送らないのか？」

ああ、非教職者のことを見忘れていた。

D・W／「いいんだ。私が疑われないための伏線なのだから。」

S・A「・・・そつか。ま、どういう状況かまるで分からぬから口出しあしないよ。じゃあな。」

D・W／「ああ。」

開いたままの引き戸から左宇が出ていった瞬間、“ストップ”が切れ、色と音が戻ってきた。

駆逐する・・・久しぶりに。

P4・D1「成る程“ワイルド・ハント”でその雑魚共をおびき出

してほしいと。」

D・W／「そつか。あの女はどうだか知らんが、取り巻き共は“ワイルド・ハント”の存在を知らんだろう。」

E2・D1「弱そうな召喚体がうるうるしていれば追うとこつけわけね頭良いじやんなかなか。」

放課後の屋上に溜まる3人のフレラ。

利害が一致した時のみ集まる3人が集まつたのは、利害が一致したためだ。

D・W／「そういうわけだから頼みたいのだが。」

P4・D1「オーケー承るHans von Hackelberg Hans von Hackelberg 先導の梟。嵐の

ふくろう

通過。獵の名手獵の名犬。食らい尽くせ“ワイルド・ハント”。「100頭の^{れいたいけん}靈体犬と100体の^{れいたいかりゅうど}靈体狩人が召喚され、方々へ散らばつた。

P4・D1「今が17時そいつらが何体いるかは知らないが取りあえずその女の臭いがついている奴を見つけアプローチするよう命令しておいた。」

E2・D1「いくら“ワイルド・ハント”と言つてもそうやつてちまちま探すのだからそれなりに時間はかかる所定の位置に全てが集うのは恐らく4時間後21時頃だ。」

D・W/-「構わないさ。それより少し聞きたいことがある。」

P4・D1「ふーん珍しいな今日は。」

D・W/-「たまにはこんな日があつてもいいだろ?。今狙つている奴らのことだが、何故群れていると思つ。」

E2・D1「弱いからじやないの?」

D・W/-「今までそんなことがあつたか?」

P4・D1「いやないな少なくともこの街ではだが。」
「いくら弱いワレラでも他と組むなんて滅多にない。」

そもそもそんなことをしてもお互いのためにならない。」

E2・D1「確かに不可解ではあるけどいいじゃない理由なんて。」

P4・D1「些末なことだ一閃に伏せろ。」

E2・D1「どうしても気になるなら拠り所かの所に行けばいいじやないか君なら自由に出入り出来るだろ?」

D・W/-「そうだな。“ワイルド・ハント”が有象無象集めを終えるまで拠り所に行くつもりだ。」

P4・D1「そうかい俺も少しばかり今回の件は気にかかるまつだからお前に協力したわけだが。」

E2・D1「しつかり見返りを聞いてこいよ。」

D・W/-「分かつていて。私を導け魂の拠り所よ。」
「指を一度パチンと鳴らし、自らを拠り所へと送った。」

拠り所に至る

D・W・ - 「やあ受付。」

受付「D・W・ - ジやないですか久しぶり。」

相変わらず陰鬱と喜悦が入り混じる面白い空間だな此処は。

今日も今日とて、悲喜こもごも入り混じつて意味不明だ。

D・W・ - 「どうだ景気は？崇高な輪廻から外れた魂、どれくらいあつた？」

受付「いや、それがね最近はとんと。ワレラは来ても、外れる魂はなかつた。」

ということは今日左宇が倒した奴は魂補充があつたというわけか。

受付「それで何しに来た。世間話は建前の建前。あんたは本音を語るが最も好きだろ。」

D・W・ - 「さすがに付き合いが長いだけはある。」

受付「約500年ですから。」

D・W・ - 「ふむ。では聞いづ。今日の昼時、10人程のワレラが拠り所に來たな？」

受付「ああ來たよ。おかげで折角のカツ丼が冷めたよ。」

D・W・ - 「名はE・04～15、そうだな？」

受付「なんだよD・W・ - が送つたのか？」

D・W・ - 「いや違う。関わってはいたがな。」

非教職者も送つていないのでから受付に迷惑はかけていないだろ。う。受付「そんなつまらないことを聞きに來たのか？」

D・W・ - 「いや違う。真に聞きたいことと通ずるから聞いたまでだ。何故あのような下衆共がワレラになつていて。そして何故群れて軍を成す。」

受付「女とE・0か。」

D・W・ - 「知つてゐるなら話は早い。全て語れ。」

受付「ONに許可は・・・。」

D・W／ - 「いらん。どうせ後で〇Ｚに会いに行くからな。」

受付「そうですか。まあいいでしょう。E・〇は全部で100人います。と言つても全員肩の様なワレラですがね。」

ワレラのくせに現世のナイフを使つていた奴がいたくらいだからな。」

受付「それらが何故皆同じ名前を冠しているかといえば、大体予想がつくでしょが同じ場所で100人が死んだからなのです。」

同じ場所で100もの咎人が死んだ・・・。

D・W／ - 「成る程。先月の伍堂刑務所の全焼事故か。」

受付「そうです。あの“事件”にもワレラが関わっていたようですがね。」

D・W／ - 「どういうことだ？」

受付「事件が起きたのは火の気の無い深夜の刑務所。燃えたのは刑務所のみ。」

D・W／ - 「刑務所のみ？」

受付「伍堂は特殊でしてね、刑務所内に警察がいません。夜は完全に監視カメラに任せています。もし脱獄などすれば自動照準のライフルで蜂の巣ですがね。それで宿直室等は刑務所と同じ敷地内、10m程離れた場所にあるんです。」

D・W／ - 「10m・・・あれほどの大火であればそれくらいの距離は無いに等しいはず。」

それなのに燃えたのは刑務所のみ。

受付「ふふふ。加えて言えば、刑務所付近の雑草一本も燃えていませんでした。通常の火事ではそんなことにならないでしょうよ。」

D・W／ - 「成る程。それについては現世に戻つてから調べる。それで、何故E・〇はワレラになった？」

受付「実はですね、伍堂には一人ワレラがいました。女のね。」

それが奴というわけか。

受付「彼女が浄化したことにより死んだ罪人達はワレラになった。」

D・W／ - 「おいおい。何故いきなりそんなに急いだ? 大体あの刑

務所に入る奴はどうしようもない『肩のはずだ』。極刑を待つ者しかいなかつただろう? 何故それがワレラになる。」

受付「・・・すみません。これより先は〇Ｚに聞いていただきたい。」

「D・W／-「そうか分かった。迷惑かけたな。現世に来た時は声を掛けてくれ。」

指を一度パチンと鳴らす。

受付「その時はまた美味しい酒を」

〇Ｚ「珍しいなお前が此処に来るとは。」

D・W／-「まあそう言つたな。極上の酒も持つてきてやつた。」

〇Ｚ「ほう・・・牛歩? 聞いたことがない。」

D・W／-「私が100年ほど前に作り置きしておいた物だ。多分美味い。」

私が作ったのだからな。」

〇Ｚ「ふむ。まあいい前の代からの好だ。何を聞きに来た。」

D・W／-「現世に下衆共が蔓延つている。ワレラの選別者よ、これは一体どういうア見だ。」

〇Ｚ「ふむ・・・。E・Oのことか。」

D・W／-「察しが付いているのならば話してもらおうか。」

黒い皮張りのソファーに身を埋める。
これもまた召喚体。

特性『使い勝手』により座る者を悦楽の国に誘つ。
とても心地が良い。

〇Ｚ「伍堂の女は知つているな。」

D・W／-「無論だ。」

〇Ｚ「女の特性は。『他者の愛』。惑つ魂を集め自らの傀儡とする。どうだ? これで納得出来ただろう? 」

D・W・ - 「貴様との面会無くか。」

0・N・ - 「我とて万能ぢやない。特性などは万物が干渉しえない事象だ。例えそれが呪文だとしてもだ。防ぐ手立てはあるうが、曲げるに能う能力などこの世に存在しない。」

D・W・ - 「つまり貴様は全てを見過」していったということか。」

0・N・ - 「そう悪く言つた。それに悪いことばかりではないだろう。」

質の善し悪し問わずワレラなのだからな。」

狩ればそのまま我が身に宿る、と云ふことか・・・。

0・N・ - 「悪質が蔓延ろうとして問題ではない。むしろ良質が昇るに樂である。」

D・W・ - 「確かにそうではある。悪質は悪質しか狩れない。それに基本的にワレラは人を襲えはしない。そう考へるならば根本的な所で不具合などない。だが、悪質は制約を違える存在に成りえる。騎士道など掲げるに値しないが、常の者に害なすを私は善しとしない。」

0・N・ - 「まあいいだろう。私は現世に干渉などしない。」

D・W・ - 「貴様が地に赴く必要は無いし、出来ないだろう? 高望みをするなよ選別者。」

0・N・ - 「分かっている。」

集団の末路、頭を潰せ

P 4 · D 1 「 · · · · 」
E 2 · D 1 「 · · · · 」

現在時刻 20 時 37 分。

既に明かりの消えた校舎の屋上。

風は吹き付けるが二つの影を揺らぐに能わない。

P 4 · D 1 「 · · · · ん。」

E 2 · D 1 「 · · · · 来たな。」

D · W / - 「 どうだ首尾は。」

影は三つになり屋上を少し埋める。

P 4 · D 1 「 順調だ今のところ 7 5 体を集めている。」

E 2 · D 1 「 ビニットもここに一つも取るに足らない雑魚共、だけどね。」

ドン！

D · W / - 「 · · · 所々で“千刃の谷”や“ラムテイル・ヴィーグ”が放たれているな。」

剣の反射した光をどこからか出現した黒が飲み込んでいく。やはり制約を違えているな。

E · O も、そして伍堂の女も。

奴ならば“ストップ”くらいわけないはずなのにな。

P 4 · D 1 「 それでどうだつたんだ。」

D · W / - 「 · · · E · O は女の傀儡。あれらは確かにフレラであるがそこに意思など存在しない。」

E 2 · D 1 「 集団心理の下に集つ愚者共といつわけね。」

D · W / - 「 その通りだ。」

許すべきではなく、値するとすれば駆逐の対象としてだけだ。

D · W / - 「 では私はそろそろ行く。指定の場所に頼んだ。」

P 4 · D 1 「 了解。」

E 2 · D 1 「 久しぶりに見せてもらひつよ君の勇姿をね。」

D・W／-「は。それに似合ひの戦闘は起きないだろ？がな。」

新西市郊外。

ある会社のビル建設予定地。

ビル、と言つても一棟ではなく十程建てる予定らしい。

D・W／-「全く。不況の時勢に随分大仰なことをする馬鹿者がいたものだ。しかし、これ以上に戦うに値する地はないな。そうだろう伍堂の女？」

女「気付いていたのね。」

D・W／-「当たり前だ。この謀を企てたのは私なのだからな。」

E・O1「ち。またてめえかよお！」

E・O2「おひ・・・馬鹿だよねうひ。」

E・O3「ぬはははは。」

・・・残りも集まつたか。

E・O100「まで・・・いぬ・・・はあはあ・・・ん、んん？これは一体どういう状況だ？」

女「E・Oを全員集めてなにをする気なのかしらお侍さん？」

D・W／-「害虫とはなんのために存在するか、簡単なこと。貴様らと同じ駆逐の対象だ。」

カデュタ・プロフォンダ。

女「・・・え？」

E・O全員「・・・な？」

女の懷に入り込み、袴々で左肩口から右腰にかけ切り裂く。

女「なにこれ・・・？だつて・・・あんたとの距離・・・100mもはなれ・・・。」

体が断絶され、女の魂は一つ消え去り死体だけ残した。

D・W／-「・・・『他者の愛』、だつたか。それは貴様が現世に存命の時のみ他者を救う。」

E・O・I 「やばい・・・い、いい今殺されたら!」

D・W・I 「自らの死の予感には敏感か。」

今拠り所は空いている。

女が戻つて来るのに10分と掛からないだろう。

D・W・I 「掛けるわけではないが十分だ。来い断ち切る大太刀。流星となり波瀾とす。拘束するは金。“千刃の谷・祢々切丸”。」

愛する愛した愛してくる者が全て消えた地に女は舞い戻ってきた。

女「・・・私の、私の・・・。」

D・W・I 「貴様の、なんだつたのだあれは。傀儡ではないのか。」

女「・・・そうね確かに。あんなのは私の寵愛に値しないわ。でもね、それでも・・・。」

D・W・I 「ふん。要領を得ない問答は好きではない。表現出来ない程度のことならば今すぐ切り捨てる。」

女「私は・・・。」

女の魂補充は不明。

やるなら速やかにやらなければ明日の学業に差し支える。

D・W・I 「行くぞ女。速やかに崇高な輪廻から外れろ。」

女「私は、全てを愛していたの。」

朝日に照らされた建設予定地。

元々地均しがれていたので地面は凹凸で覆わっていたが、今はそれに輪をかけて高低差が激しい。

P 4 · D 1 「激しい攻防だったな。」

E 2 · D 1 「伍堂の女だつたつけまともな名前も持ち合わせていかつたくせに随分耐えたね。」

D · W / - ' · · · 。「

計 3747 回だ。

彼女はそれだけ死んだ。

D · W / - ' · · · 最低の幕引きだ。そして最悪の劇だつた。」

愛だのなんだのと言いながら奴は何度も何度も我が刀身の前に切り捨てられた。

それも 1000 回目以降は反撃へと切り替えしていくがな。

伊達に魂を稼いでいなかつた。

その証拠に私も二つの魂を消費した。

P 4 · D 1 「ん、んー疲れた学校行かなきやならんし帰るかな。」

E 2 · D 1 「そうだね。」

二つの影は言葉を残し去つた。

下衆共の掃除は出来た。

その大本も断つた。

残つたのは私の心の不快のみ、か。

この様な戯れ事は金輪際お断りだ。

朝日は地を照らすが、人は照らさなかつた。

千堂隆の場合1（前書き）

得たからには行使すべきだ。

権利は行使されなければ何の意味も示しはしない。

それが例え人を幸せにする権利であろうと、人を貶める権利であろうと関係ない。

そしてそれが、復讐の権利だとしてもだ。

人は斯く在るべきなのだ。

権利の行使者であれ。

時と場合など無視しろ。

必要なのはタイミングだけだ。

いや、それすらも必要ない。

私に従う、それだけで十分だ。

裁判官「判決。被告、千堂隆を懲役30年とす。」

千堂「な・・・！ふざけるな！あいつが、あいつが真犯人だつて言つてる」

裁判官「静肅に。これにて閉廷。お疲れ様でした。」

・・・また一人、救うべき羊が増えたか。

黒のロングコートを纏い、黒のフェルトハットを目深に被つた老人。彼が今傍聴していた裁判は被告人の有罪判決で幕を降ろした。

被告人は憤怒し、裁判官はただただ冷静であり、そして証人席に座る男は笑みを湛えていた。

『強盗』1回、『殺人未遂』1回。

所謂強盗殺人の殺人だけ未遂である。

ただ、被害者は植物状態であり、更に言つなら回復の目処は立つてない。

実質強盗殺人と言えるだろう。

そしてその罪を犯したのは被告人ではなく証人の男だ。

証人「いや、安心しましたよ。」

裁判所の前に出た証人が安堵の表情を浮かべ記者達に答えている。全く以つて不愉快な表情である。

被告人は既に行つたか・・・。

とりあえず夜が楽しみである。

伍堂刑務所。

全焼してから一ヶ月と経たず刑務所は元の形に戻っていた。ワレラが関わった事案なので〇Ｚが対応したらしい。詳しく述べられないじどうでもいい。

「……さて。彼の部屋は此処か。」

臍体化し壁の中に入していく。

ふむ・・・3大欲求とはよく言ったものだ。

失意の底に落とされてなお睡眠欲はしつかり湧いてくるらしい。

「これ。起きよ青年。」

千堂「・・・あ？んんん・・・？朝、ですか？」

「君にとっての朝の定義が起きた時であるのなら現在は朝だ。だが基本的にこの時間帯は夜と呼ばれると思われる。」

千堂「・・・？」

寝ぼけているか、まあそれも致し方ない。

「無実の罪で投獄されたとあつては、現実逃避の虜になつてもおかしくはないのだからな。」

千堂「・・・えーと、ところで貴方誰？看守？」

「ほう。これは驚きだ。こここの刑務所の看守はロングコートを来て見回りなぞをしているのか・・・。」

千堂「あれ・・・？確かにこの刑務所つて夜は見回りとかなかつたような・・・。」

「いい加減目を覚ましてくれ。」

千堂「・・・看守じゃない。ここは一人部屋。・・・つあ

「おつと。悲鳴は止してくれ近所迷惑だ。」

千堂「・・・！」

取りあえず寝転んだままの男の口を足で塞ぐ。

無論靴は綺麗であり、更にタオルを巻いてある。

「さあ、黙る気になつたかな？」

じくじく頷く青年に満足したところで足を退けてやる。

千堂「げほつ・・・そ、それで貴方は誰ですか？」

D・G0「ようやく名を冠することが出来るか。私はD・G0。裁

断介添人とでも呼んでくれたまえ。」

千堂「裁断・・・介添人ですか。」

D・G0「そうだ。君の無実の罪に対する報いを君に、あの男への報いを君に遂げさせるために、君に協力しに来たのだ。」

千堂「・・・どういう意味ですか？」

D・G0「復讐させてやると言つてているのだ。あの男にな。」

千堂「復讐？」

D・G0「そうだ。」

起き上がつた男はまだ頭の整理が出来ていらないらしい。

クエスチョンマークが頭上に浮かんでいそうだ。

千堂「あの、えーと、まだあまり意味が分からんんですけど。」

D・G0「よろしい。万事は常にそういうものだ。自らの知りえないことは遙か彼方でのみ蠢く。取りあえず体感してもらおう。」

千堂「へ・・・あぐ！？なにを・・・？」

男の頭を鷲掴み、締め上げる。

とても老人の力とは思えない。

D・G0「ではいくぞ。『裁断介添人』。」

千堂「ここつは酷い。『殺人』7回ですって。」
D・G0「ふ。その程度なことはない。どうだ、これでようやく納得に至ったか？」

千堂「はい・・・俺に何かしらの力が宿つたとこつことは。」

D・G0「よろしい。ではここにもう用はない。」

再び男の頭を掴む。

臍体となり我に続け。

刑務所の壁を通り抜け外に出る。

千堂「んー・・・まさか一日で出られるとせ思つてもみませんでした。」

D・G0「満足してもらつては困るな。君の目標はあくまでも復讐だということを忘れるな。」

千堂「分かつてますよ。・・・あ、一つ聞いていいですか？」

D・G0「なんだね。」

千堂「復讐するのはいいんですけど、その後俺はどつなるんですか？」

D・G0「そんなことは終えた後で構わない。」

・・・久しぶりに伍堂から連れていくのだから挨拶くらいしていかか。

D・G0「少し宿直室によつて行くぞ。」

千堂「え？あ・・・いや、そんなに堂々と脱獄する人は映画でもみたことないんですけど。」

D・G0「ふん、安心しろ此処伍堂はワレラの管理下にある。それに君は脱獄をするのではない。何故なら、君は投獄されるようなことをしていいからだ。此処には日帰り旅行で来たんだと思え、ばいいのさ。」

千堂「な、成る程。それは脱獄ではありませんね。」

今伍堂に居るのは確か“伍堂の女”と“関係ない男”だったな。
3年ぶりか。

相変わらず女はE・〇を侍^{へは}ているのだろうか。

千堂隆の場合4

関男「これは裁断介添人。お久しぶりですね。」

D・G0「久しぶりだな関係ない男。伍堂の女が見当たらないが、此処に非番などという制度はあったかな。」

関男「貴方は今まで京東きよーとに行つていたんですね。・・・ならばご存知ないのも致し方ないということ。」

ということは・・・。」

D・G0「外されたか。」

関男「ええ。殺つたのはD・W/-です。」

D・W/-・・・轍醍醐じよとだつたか・・・あの侍相手では伍堂の女は勝てるはずがないか。」

D・G0「そうか。まあ良いわ。彼が動くときは基本的に常成る者達のためにだからな。」

関男「確かに伍堂の女はE・Oを野放しにし過ぎましたからね。私もあの殺しは正当と感じています。と、外れた奴の話なんてどうてもいいんです。今回は・・・千堂隆、そいつの介添えですか？」

D・G0「その通り。ふ、せつかくよつたんだ。今回はちゃんと手順を踏むか。」

関男「分かりました。では千堂隆。」

千堂「はい？」

関男「この紙に記入していくつてくれ。なに、選択肢にYesかNoで答えるだけの簡単なものだ。」

以下紙面の内容を示す。

- ・私は罪を犯していない Yes/No
- ・私は復讐ふしゆを遂げたい Yes/No
- ・私は裁断介添人であるD・G0のやり方に賛同する Yes/No
- ・私は復讐ふしゆを遂げたい Yes/No
- ・私はワレラについて理解した Yes/No

千堂隆の結果

新西市の中中央付近に建つマンションの最上階。

証人だつた男がワイングラスを片手に外を眺めている。。

証人「ふ・・・ふふふ。いやあ愉快だつた。面白い劇をありがとうございました先生方。」

弁護士「いやなに。君のためだ一肌脱ぐのは当然だろう。」

検事「ははは、そうですな。」

裁判官「うむ。では静肅におのおの方。」

証人「では、今日という日を彩つた私のための喜劇に乾杯。」

全体「乾杯。」

・・・成る程。

不自然なほど千堂に不利な裁判だつたがこういふことだつたか。

千堂「く・・・こいつら・・・。」

臍体となり部屋に侵入した我々を待つていたのは証人だけではなく、裁判の主要人物が全員集まつていた。

隣に立つ千堂の顔は紅潮し、今にも目前の前の証人を殺さんとする程いきり立つてゐる。

D・G・O「まあ落ち着きたまえ千堂。君が殺したいのは取りあえず証人だけだろう?」

他3人は確かに罪を犯しているが、咎人と呼べるレベルではない。

D・G・O「『犯罪の透視』で君にも見えるだろうが、他3人は大した罪を犯していない。あれでは殺すことは出来ぬ。」

両腕を折るくらいが限度だらう。

千堂「じゃあさつさとこいつを殺しましょ!」

D・G・O「ふむ良いだらう。先ずは舞台を整える。暫し待て。」
さて・・・どの偽装空間に行こうか。

塔か煉獄か冬か。

D・G・O「・・・よし。中途の地獄。贖罪の地。ある意味での報い

ある意味での封印。逃げ出す術は無く許されない。“煉獄プルガト

リウム”

千堂「うわっ！？」

灼熱が辺りを覆い尽くす。

1秒と経たず、私達は煉獄へ歩を進めていた。

証人「・・・あ？なんだこれは・・・！？」

千堂「こ、此処はどこです！？」

D・G・O「煉獄だ。此処で存分に復讐劇の主役を演じるといい。

指を鳴らし『臍体化』を解く。

D・G・O「さあ証人に殺意を向ける。そうすれば『臍の見掛け』の効果は無くなる。」

千堂「も、やつてもいいんですか？」

D・G・O「ああ構わんよ。存分にやりたまえ。」

そして私を楽しませる。

証人「なんなんだよ・・・ん？」

千堂が証人に殺意を向けたことにより証人は千堂を視認する。

証人「お前・・・！刑務所に居るんじや・・・。」

千堂「この糞野郎。よくも俺を、俺の、俺という存在を穢してくれたな。」

証人「・・・は、ははははは。そうかそうかこれは夢だ。所謂明めい晰きも夢というやつだな。ふ、全く私も焼きが回ったようだな。お前ごときに同情するとはな。ははははは。」

千堂「く、Create 剣。」

名も無き剣がゆっくり形成されていく。

証人「ほつ。さすが夢の中だな。そんなマジックが使えるとは。」

千堂「・・・あのD・G・Oさん。あいつ完全に夢だと思っているみたいなんんですけど。」

D・G・O「ふん。痛みで以つて覚醒させればいい。その後ならば恨みの文句も届くだろ？」

千堂「成る程。ハツ！」

千堂の投げつけた剣は、正確に証人の左腕を貫いた。

証人「・・・え？ あ・・・痛い？ つは！？ があああ痛い痛い痛いああああ！」

千堂「正気に戻つたか下衆野郎。」

証人「ぐがあああ痛いい・・・。」

千堂「おい！」

証人「ひあがつつか！？」

千堂が証人を蹴り飛ばす。

・・・今日は一番のシナリオで終結を迎えるか。

千堂「この人で無しが・・・。他人を牢屋に30年も閉じ込める様な罪をよく擦りつけられるな貴様は。」

証人「は・・・くあつ！？ 止めてくれ・・・。で、出られたならそれでいいじやきあぐああああ！？」

一本目の剣が証人の右腕に刺さる。

千堂「ふん、つくづく屑だな。まあいいさ。俺は別に謝つてほしいわけじやないからな。 Create 剣。」

更に右脚と左脚を貫き地面まで剣を刺す。

証人「ぎやあああああ！ やめろおおお！」、この俺にこんなことをして、ただで済むとああぎやおあああ！」

脚に刺さつた一本の剣を段々倒していく。

血が溢れると共に、骨が断ち切られていく音がする。

腱もプチプチ音を発てながら切れしていく。

証人「いたい！ ややややややめ、やめはあやめてくれくはがつああああああ！」

遂には両脚が両脚共太ももより下が二つに分かれた。

証人「か・・・りゅぽ・・・ぼがお・・・。」

ふむ、最早まともに思考出来る状態ではないな。

千堂「はあ、はあ・・・ぐくくく。あ一つははははははははーざまあのな糞野郎！ 痛いか？ なら泣いて叫んでせいぜい生を謳歌しろよ！ あはははははは！」

・・・ 一番つまらないシナリオで幕引きだ。

千堂「よし、これで止めだ！くらえ“千刃の谷”！」

・・・。

“千刃の谷”は降り注がない。

千堂「・・・いや、もう死んでるかこいつ。これ以上ぱらぱらしたら勿体ないですよね。見てくださいよこの顔。涙と鼻水と涎、それに吐瀉物でぐちゃぐちゃだ。両腕に剣が刺さって、両脚は真つ二つ、おまけに失禁してる。こんな醜態晒して死んでいくつてのはどんな気持ちなんでしょうねえ？」

D·G·O「私が知るはずもない。随分饒舌になつたな千堂。復讐を果たし爽快か？」

千堂「ええそりやもう！貴方には感謝してもしきれないです。」

・・・ “煉獄ブルガトリウム”解除。

千堂隆の終演

裁判官「う、うわあなんだこれは！？」

弁護士「う、うぼれあ！」ぼつ・・・・・。

検事「く・・・・・。」

突如現れた凄惨極まりない殺され方をした死体に、一人は単純に驚き、一人は単純に不快感を最高潮まで達し結果嘔吐、一人は冷静に眺めるだけだつた。

千堂「こいつらも許せないです。いや許しちゃいけない。法により人を裁きた助ける奴がそれを破つたんだ。万死に値します。」

D・G・O「許可出来るのは両腕を折ることまでだそれ以上は言い終えるより早く、千堂はグロアディで裁判官の首を墮とした。

弁護士「今度はなんだ！？」

千堂「貴様のような奴は死ね。」

弁護士「へやつ・・・・！？」

弁護士の体が上と下に分かれる。

検事「・・・・・。」

そしてソファーアに座りワインを酌み交わす私と検事。

千堂「・・・・つて、なにやつてるんですかD・G・O。」

D・G・O「それは私の台詞だな千堂。忘れたか？君は裁断介添人であるD・G・Oのやり方に賛同する。それにY e sと答えたはずだ。」

検事「・・・・その通り。全く、興醒めさせてくれる。」

千堂「どういうことですか？そいつはなんです？」

「忘れたかな？この顔を。」

千堂「お前は・・・・証人・・・・？」

検事だつた男はいつの間にか証人になつていた。

証人「検事なら、ほらそこに。」

検事「う・・・・がは・・・・。」

証人が指差す先には両腕を折られた検事が床に蹲つていた。

証人「コクッ。うむ。死んだ後でこんな体験を普通に出来るとはね。

驚きだね千堂隆。いや、君はまだ死んでないか。」

千堂「どういうことですか？」

D・G0「私は言った、君の復讐を手助けしてやるとね。ただ君は誤解している。復讐などは一代で切れるモノではない。二代、三代、と永遠に続していくのだよ。怨嗟の連鎖が復讐の輪を紡ぎ、そして終えた復讐をまた誰かが受け継ぎ、新たな復讐者として私に招かれる。ま、復讐された者が招かれた場合などはこれで切れることがあるのだけどね。」

千堂「・・・裏切ったな。」

D・G0「ははははは。面白いことを言うな君は。先に裏切ったのは君だ。裏切られた者には裏切る権利が与えられるし、裏切った者には裏切られる権利が与えられる。更に言つならこれは裏切りなどではないよ千堂隆。君は私の仲間でもなんでもない。約束を反古にしようが裏切りにはならない。君と私は、たまたま会つただけに過ぎないのだからな。」

千堂「・・・く、糞野郎が。ならお前も殺してやるよ!」

D・G0「強大な力を持った弱者は、それで自らが強者になつたと勘違いしがちだな。未だに『裁断介添人』が君に掛かっていると思つてているのか?」

千堂「な・・・く、Create剣!」

唱えたところで剣が現れるわけもなく。

言葉だけが現れ消えていった。

千堂「な、なななな・・・。」

D・G0「君も既に復讐される者に成り果てているのだよ千堂隆。さ、証人よ。権利を使用したまえ。」

そして私を楽しませる。

ヒローゲ・千堂隆の終演その後

私の力により猶予された証人の魂は、あの1件で消去された。
千堂隆の死体はマンションに残したまま。

警察は脱獄した千堂隆が証人に復讐しに来たが、その時証人は不在。代わりにそこにいた裁判官、弁護士を逆恨みで殺し、検事の両腕を折つた。

その後持参した日本刀で自らも命を絶つた。

それだけの推理で今回の事件は収束し、証人について言及されることはなかつたという。

終わり方としては私の気に入るモノではなかつたが、たまにはこんな復讐劇もいい。

私は裁断介添人。

貴方の復讐を手助けする功労者であります。

プロローグ

S・A 「あ。」

P4・D1 「む。」

田舎に住む奴は何故デパートが好きなんだろうか。
休みになると表の駐車場は勿論、立体駐車場も満車になるなんてのはざらだ。

今日も例に漏れず満車の様だが、車に乗らない俺には関係がない。
ついでに言うなら俺は別段デパートが好きというわけではない。
用があるから来ただけで、用もないのになんとなく来る奴らとは違う。

まあその用というのも俺のではなく妙のなんだが。
自分で行けばいいものがあの女、用事があるとかでこっちをほっぽつて行つちまいやがつた。

P4・D1 「成る程なかなか難儀な理由だな左宇。」

S・A 「だろ？・・・一人か？珍しいな秀一と一緒にじゃないなんて。」

P4・D1 「確かに仲良し兄弟だが俺達にだってプライベートはあるんだぜ此処に来るときは大抵一人だしな。」

S・A 「へえ。何を買いにきたか聞いていいか？」

P4・D1 「ふむお前も一緒に行くか恐らくT・O・・はまるで興味を示さないだろうがお前はそれなりに興味が湧くと思うんだがな。」

S・A 「いいのか？ならついていかせてまいか。」

S・A「・・・はー。知らなかつたな。生前もこの街で生活してた
じこのデパートにも来たことがあるが、こんな所に本屋があるなんて。

」
P4・D1「それはそだらうな大体予想は出来ると思うがこの店
を経営しているのはワレラだ俺より長くワレラをやつしている奴でな
俺が逆立ちしても敵わない程の奴なんだがそれくらいの奴でもない
と集められないような本が此処にはたくさんあるんだ。」

S・A「・・・いつにも増してまくし立てるな。」

P4・D1「秀一がいなからな秀一の分も喋るんだから仕方ない。

」
大体なんでこんな変な話し方なんだろうか。

・・・めんどくさそうだから突つ込まないけど。

P4・D1「さあ入るうぜ超面白いからな。」

引き戸の扉を開けると、古書特有の匂いが漂ってきた。

P4・D1「御免よA5・E▽。」

A5・E▽「おおペルソナか入れ入れ。」

P4・D1「言われなくても入るさほら左宇も。」

S・A「お邪魔。」

引き戸を閉めると暗くなつた。

暗いがしつかり周りが見えるという若干不思議な感じだ。

A5・E▽「阿部左宇だな。」

S・A「驚いた知つてるのか?」

A5・E▽「無論だ。現世だらうが後世だらうが拠り所だらうが煉
獄だらうが地獄だらうが天国だらうが私の知らぬことはない。」
そりや凄い。

全知全能と謳われる神さんも裸足で逃げ出すレベルだ。

P4・D1「それで今回の新作は?」

A 5 · E √ 「ちゃんとピックアップしてある。自由に回れ。」

P 4 · D 1 「分かつた行こうぜ左宇。」

S · A 「お、おつか。」

ペルソナについて奥に進んでいく。

なんというか、遠近感覚が狂う。

とても遠くにあると思う本が、その実すぐ近く手の届く所にある。

P 4 · D 1 「それは違うぜ相手がこっちの意思を読み取つて寄つて来てくれるんだよ。」

S · A 「ほー。世の中には俺の知らないことが溢れてるな。」

P 4 · D 1 「神秘が詰まっている世界なのを此処は。」

S · A 「で、お前はなにを探してるんだ?」

P 4 · D 1 「ああ光つている本が新しく入荷された本だ見つけたら教えてくれ。」

S · A 「それならあそこに、つといや此処にある。」

遠くにあつた光る本に意識を向けるとこちらに来た。

S · A 「ふーん、見た目は大学ノートみたいだな。」

表紙には“DynamicWorld”と書かれている。

P 4 · D 1 「動的世界かA 5 · E √ 。」

A 5 · E √ 「その昔世界には、権限者と呼ばれる世界を一度だけ思
うままに変えられる存在が居た。そのノートは、権限者が世界を変
える時に使用していた物だ。」

ペルソナがペラペラとページを捲つていく。

びつしり詳細に世界の構造が書かれているページもあれば、一言で
済ませているところもある。

A 5 · E √ 「そのノートの特性は『実体験』。体験したいページに
触れ“ぐるー”と唱えれば体験出来る。ただ気をつける。中で死
ねば魂は消費される。つまり中の人間が干渉してくるということだ。」

S · A 「へーそりや面白い。」

金持ちになりたいとか独裁者になりたいとかいう世界は詰まらな

さそりだが、殺人が常套化した世界つてのと小説の世界つてのは面白そうだ。

P 4 · D 1 「気に入つたみたいだな左宇 A 5 · E V 「これ幾らだ？」

A 5 · E V 「負けて1京だな。消費税も負けといてやる。」

P 4 · D 1 「買つた振り込んでおく。」

A 5 · E V 「まいどー。」

・・・1京つて。

国家予算でも聞いたことがない。

P 4 · D 1 「まこれは後で秀一と妙を交えて遊ぶか。」

ペルソナが別の光る本を手にする。

P 4 · D 1 「へえ人皮装丁本か久しぶりに見たな魔術関連の本かふむ人皮装丁本は欲しいが今更この程度のグリモアを貰つてもなキマリスの“図書館”に行けば腐るほどあるしでもキマリスは人皮装丁本は持つてないんだよな気に入らないとかでうーむこれは幾らだ? やつぱり秀一も連れて来るべきだ。

一度にこれだけの会話情報を盛り込まれても困る。

A 5 · E V 「それはな、お前が言う通り人の皮というところしか価値が無くてな。1億でいい。」

P 4 · D 1 「1億か大したことないな買つた。」

A 5 · E V 「まいど。」

その後1時間に渡りペルソナは新書を漁り、べらべら感想を言い、全てをアホみたいな値段で買つていった。

俺は適当にその辺の本を立ち読みし、着実に本来の目的を忘れていつた。

・・・だって面白いんだもの。

T・O・・「ふーん。覚めてる?」

S・A「いやだから悪いって謝つてんだろ・・・。」

P4・D1「まあいいじゃないかT・O・・。」

E2・D1「そうだよせつかく面白そつた本を買ってきてあげたんだから。」

E・NE「・・・ヒジヒで、なんで俺が此処にいるんだ?」

S・A「呼んだ結果お前が此処に来たからだろ。」

T・O・・「まあいいじゃない。ビーセこの回はギャグ回なんだからさ~羽田外そ~よ。」

D・W・・「ははは。私も呼ばれているくらいだからな。」

一応知らない世界に行くことこのことで、頭数いた方が安心という考えに至つた。

そして知り合いのワレラに呼び掛けた結果、この面子になつたのだ。

P4・D1「やつぱE・NEは構つてちやんだよな。」

E2・D1「自分を殺した奴らと絡むなんて意味分かんないよね。」

・・・うーむ、それは俺にも言えることなんだろうか。

E・NE「か、構つてちやん違つ!」

D・W・・「なんでもいいが、そろそろ行かないか?私も何気に楽しみなのだが。」

T・O・・「そーねー私も楽しみ。」

P4・D1「オーケーじゃあ準備しよう。」

E2・D1「さあみんな声を揃えていつせーのーで。」

全員「“ よーへー。 ”。」

プロローグ・彷徨う彼方・

この世を統べるのはただ一つの存在。

それがそれに気づくことは確定ではない。

気づけば変化し、気づかなければ時は経つのみ。
統治者が望んだ世界に世界は移行し

S・A 「なんだこれプロローグか？」

T・O 「そうみたいねー。」

P4・D1「A5・E▽に聞いた話によると基本的にこの世界の時間に沿つて進んでいくが早送りも可能らしいあと常時臍体ろうたいでいるのも有り一回死んだら後は鑑賞モードになるそしてこれが重要なところだがこの世界にも俺達みたいな異能者が存在するイヴって言うんだがそいつは咎人50人分らしい。」

S・A 「秀一にも話させろよ・・・。」

E2・D1「無理だよ僕はA5・E▽から説明を受けてないんだから。」

「そういえばそうだった。」

常に情報を共有してゐるもんだと思つてたな。

「今、なんて言つた？」

「おいおい耳悪いのかよ。早めに」

D・W▽「む、本編が始まつたようだな。」

E・NE「何時まで臍体でいるんだ？」

P4・D1「もうちょっとゆっくり見てようぜ。」

E2・D1「どういう話か探るのも大事だからねってあれ？」

S・A 「どうした？」

D・W▽「T・O・なうさつき外に行つたぞ。」

・・さすが協調といつ言葉を嫌う者だ。

「てめえらの為に働く事がだよ糞爺。察しろ馬鹿。」

「そうか。そなうらそと、はつきり言えればよかつたんだ。そなうす

れば、さつさと貴様を殺せたんだから」「

バタンと扉が開かれ、10人の武装兵が部屋になだれ込んできた。

「用意がいい・・・つてあれ?」

「お、おいどうした!?」

S・A「・・・はあ。」

壁を突き抜け廊下に出ると、15の死体が生産されていた。

T・O「はは死んでるのに生産つておつかしく。」

S・A「いきなり物語を捩曲げてやるなよ。困惑してたぜ中の2人。

「あれ、爺消えてるし・・・まあいいや帰るか。」

E・N E「あーあー。わけ分からなくなつちまつたな。」

P 4・D 1「まあいいでしょ。」

E 2・D 1「大抵こういう場面は主人公がどんな力の持ち主かを表現するところだしさ。」

飛ばしても問題はない、か。

T・O「グロアディが一気に10になつたよラッキー。」

・・・先が思いやられる。

詰まらん、早送り

「というわけで敵が全滅してたんだが。」

「えらい楽に済んで良かったやん。」

「そういう問題じゃないと思うんだけど。」

「それについては追い追い考えればいいだろ？ では今我々が一体どんな

」

S・A「ijiは見る必要あるのか？」

P4・D1「もう少しすると最強クラスの奴が襲撃に来るみたいだ。

E2・D1「で主人公（仮）が戦闘でも見逃されて終わるという有りがちな話だね。」

T・O「じゃーその強い奴を

S・A「いやこれ以上じつちやになるとかわいそうだ。 もう少し早

送りしようぜ。」

P4・D1「オーケー。」

E2・D1「早送りスタート。」

T・O「しかしみんな汚い言葉を使つわね～まるで洋画みたい。

」

確かに出てくる奴の殆どが悪態をついている。

これを考えた奴はさぞ口汚い奴か、妙の言つ通り洋画氣触れの奴なんだろう。

ドカーン！

E・NE「爆発だな。」

D・W「あつちだ。」

艦体の便利なところは宙を浮いて移動出来る点だな。

超楽。

音の方に向かっていくと、関西弁の杵築宗司とかいう奴が壁に張り付きその先を見ていた。

行ってみると2人の男が対峙している。

「いやや悪いのかよ糞野郎。」

「いや。俺には関係ないしな。お前が此処で捕まりや好都合だし。」

P 4・D 1「1人はさつき如月薰達が自己紹介しあつてた奴だな。」

E 2・D 1「もう1人は出宮真いわゆるラスボスみたい。」

ネタバレ早いな。

「子供つてのに警戒心働く奴は少ないんだよ。見た目が優等生、ん？」

出宮真は、杵築宗司が隠れている方に視線を向けかけたが・・・。

D・W / 「あやつ、今こちらを見たな。」

S・A「やつぱりか？ 脣体のままよな俺達？」

E・N E「鏡にも写らないしそうだろ。」

出宮真の方を向くとバツチリ目が合った。

・・・まあ流石はラスボスってことなのかな。

「なんだよ。」

「なんでもねーよボケ。ああ因みに」

P 4・D 1「詰まらん早送り。」

E 2・D 1「スタート。」

所変わつて此処はアフリカラしい。

・・・暑い。

S・A「なんで臍体が暑さを感じるんだよつたぐ。」

T・O・・・「あ～つーいー・・・・。」

E・N E「今日も元気だ・・・水がうまい・・・。」

P 4・D 1「飛ばす？」

E2・D1「でももうちょっと面白いシーンだから飛ばさない。」

じゃあ聞くな馬鹿。

「田に見えないものなんて無いのと同じだよ。探しているリモコンは、実は田の届く範囲、手を伸ばせば届く範囲にあるのに気づかない。それは探している当人にとっては存在していないのに同義だろ？」僕の足場もそうさ。僕には見えるけど君には見えない。僕にとつては当たり前に存在するそれも、君にとっては架空の物体にしか過ぎないんだよ。だから触れることも壊すことも不可能なのさ。」

E2・N E「なあ、あの田中太一とかいう奴が言っている見えない足場つてあれか？」

E2・N Eの指差す方には宙に浮いた土台。

S・A「みたいだな。」

普通に見えるんですけどが。

P4・D1「あれはどうやら俺達が出す剣や召喚体に近いらしい。」

E2・D1「言わばあれも靈体みたいなもんだからね田中太一は今の僕達を視認できるかも。」

・・・うん。

田中太一はさつきからちらちらちらを見ている。

そのせいか田中太一と対峙している切裂男はイライラしている様だ。

S・A「これはいつそ堂々と観戦した方がいいんじゃないかな？」

D・W／＼「いやあそこを見てみろ。」

T・O／＼「あらー・・・春日井直太とセキムなんとかね。」

P4・D1「あと車に乗った組もいるからな。」

E2・D1「今出でいくと大分混乱しそうだね殺るなら一人ずつでしょ。」

殺すのは決定なのかよ。

P4・D1「あーそうだじゃあ先に一応のラスボスを倒しにいこうか。」

E2・D1「んーじゃあチャプターは夢の後だねスキップ。」

飛ばさないんじゃなかつたのか

神は此処に。

神「ん。誰だ貴様らは。」

S・A「臍体意味ないみたいだな。」

可視体に戻る。

よく分からぬ空間に、高校生くらいの少女が居た。
シンプルな石造りの椅子に座している。

神「・・・ほう。外の世界から来た者とな。」

E・NE「なんかいろいろバレバレみたいなんだが。」

P4・D1「それはそうだろうな。」

E2・D1「なんたつてこの世界の神なんだから。」

神「よく分かっているようだな。全く、話を曲げおつて。」

T・O「それで、誰があの子とやるの?」

既にやる気満々の奴が1人いるな。

D・W「「私だ。」

そうお前だ。

D・W「「祢々切丸」。」

神「ほう。面白い刀だな。『光の剣』。」

醍醐の祢々切丸に対し、神は光で形成された剣を構えた。

神「ああそうだ。貴様らも待つてることはないぞ。」

D・W「「・・・この私に多勢に無勢をしろと言つのか?」

神「そうではない。出る光。」

光「はい。」

男が出てきた。

神「神話“聖者の行進”。“ゼウス”、“オーディン”、“トール”。

P4・D1「おお・・・。」

E2・D1「これは・・・。」

・・・初めてこいつらの合詞に文末の句読点以外の符号が入ったな。

それも仕方ないか。

俺達も英雄、悪魔、天使、神話の生き物は召喚出来るが、神となると話は別だからな。

或いはそういうた呪文があるかもしれないが、気軽に召喚したあいつと違い相応に支払わなければならぬだろう。

P 4 · D 1 「・・・面白い。こいつらは俺達が殺る。72柱の1柱。序列13、85の軍団を収める魔神。怒りの召喚、ハシバミの杖を向け描く。奏者の鼓動に合わせ出陣。護符となる銀の指環。忘ることなく死の指へ運べ。私は告げるソロモンの封印を破る主。来たれ怒髪衝天の王“ベレト・ソロモン”。72柱の1柱。序列66、20の軍団を収める魔神。勇猛なる黒光りの戦士。文学。を与える。勇猛心を与える。悪靈の統括。迅速なる行動値。来たれ勇猛果敢の戦鬪神“キマリス・ソロモン”全てを知る者、回答者。罪悪に対する行為を施行する者、報復者。鎖の断絶、壊せぬ物無し。“フラガラツハ”。

E 2 · D 1 「光は左字と妙に任せると“ボスティア・ラ・グロアディイ”。

ベレト「なかなか面白い場面に召喚されたようだなキマリス？」

キマリス「その様です。」

ゼウス「ベレトか・・・。久々に現世に呼び出されたかと思えば素晴らしい娯楽が用意されていたなオーディンよ。」

オーディン「ふん・・・確かに面白い。」

トール「ふははははは。」

やばいな。

あいつらが此処で暴れたら皆死ぬ。

S · A 「おい、せめて偽装空間に入ってくれよ?」

P 4 · D 1 「だそうです頼みますベレト。」

E 2 · D 1 「じゃあそつちはよろしく。」

ベレト「仕方あるまい。44の軍勢、無限であり夢幻の攻城。最高末路の生き地獄、解放にして開放の死路。準備は出来た。最上の待

つ戦争を辿れ。“ロード・デス・ウォーヘル”。
2人の人と2柱の悪魔、3体の神、2本の剣はベレトの世界に飛んでいった。

D·W·H「私はその様な呪文を記憶していない。移るなら早く移れ。」

S·A「了解。任せた妙。」

T·O·H「あいあーい。中途の地獄。贖罪の地。ある意味での報いある意味での封印。逃げ出す術は無く許されない。“煉獄ブルガトリウム”。」

S·A「なんで煉獄をチョイスし

E·NE「俺も

光「・・・

T·O·H「行つてきまー

光「『光は創世の彼方より来、火に煌めきを、水に潤いを、大地に清々しさを、電気に鋭さを、物質に形を与えた。』。」

S・A「たんだ！」

E・NE「行くのかよー！」

T・O「す。」

“煉獄ブルガトリウム”は中途半端な死後の世界を体現する偽装呪文。

此処で死ねば魂の数など意味はなく輪廻の環から外される。

T・O「いいじゃない。此処で生産される死体は一つか二つなんだから。」

E・NE「おい、そのうちの一つは俺とか」

T・O「あらよく分かつたわね～えらーい。」

E・NE「最後まで言わせろ！」

・・・コイツ完全にキャラ崩壊してんな。

ある意味美味しい役ではあるが。

光「残念だが俺の死体は作れない。なぜなら俺には個人という概念がないからだ。光は名、影は体。光が写し出せるのは、所詮影だけなのだから。」

S・A「意味は分からんが、取りあえずお前は倒させてもらおう。」
ストーリーはぶつちぎりで無視しているがこいつなった以上さつわと殺つてさつさと本編に戻るしかない。

T・O「大丈夫。確実に殺す。『ボスディア・ラ・グロアディ

』。」

E・NE「戦乙女。戦死者を選ぶ女。バルハラの運び手——ベルンゲンの歌。“ワキュレール・ヒルデ・リュブン”。隠れ蓑。受け取る返り血。竜の魂。不死の騎士。終局にて墮落。——ベルングの指環“グール・ジフ・リートシズク”。殺す。殺す殺す殺す。正義の

下に殺戮。騎士の名誉に於て殺戮。殺戮の下に殺戮。魂の蒸発。体の昇華。死の頌歌。集え裏切り指輪は点す。“ベルンズ・ニー・グリング”。

S・A「相変わらず詠唱拒否出来ないんだなどうでもいいけど。“ベルンズ・ニー・グリング”。“BLOODY-MARY”。“この3人の中で一番弱いのは俺だがな。

T・O・・「ん~一応やつとこつかな。輝け魂。昇華に繼ぐ昇華。神聖の下に更なる誓いを。“サブゴッド・オブ・リメイション”。“おお。妙の体がなんとか人みたく光る。

“サブゴッド・オブ・リメイション”はナイトの力を倍増させる呪文。

英語っぽいがこんな単語はない。

光“代理、Agenzia。”

代理“Infinite army”無限の軍勢。出現するは眞の影。

Agenzia“Gun Spada infinito”無限の剣銃。出現するは眞の武器。

S・A「・・・！」

E・NE「て、P4・D1にE2・D1！？それにD・W／-だと・・・！」

更に言うならその手には“フラガラッハ”、“ボスディア・ラ・グロアディ”、“祢々切丸”。しかも黒を纏つている。

E・NE「・・・済まないがT・O・・、召喚剣を貸してくれ。」

T・O・・「はいはい。“ダーインスレイヴ”。サン・ピエールの歯。サン・パジールの血。司教サン・ドニの髪。サント・マリアの衣の布端。12勇士の魂。自傷の剣、されど壊れず眠りに就ぐ。“デュランダル”

E・NE「あ、ありがとう。」

ヒ「感謝します。」

S・A「俺は醍醐を殺る。E・NE達は太宰ペアを頼む。」

E・NE「分かつた。」

光「では始めよう。」

神「貴様の名、D・W・ - とはどういう意味だ？」

D・W・ - 「ふん。ちゃんと呼んでいるじゃないか。それで合つて
いるし、轍醍醐のイニシャルだと思ってくれて構わん。」

神「そうかい。 “ Creativity is a Human
Treasure ” 創造は人間の宝。 “ Slower than
Light . But Quick ” 光よりは遅い。でも速い。 “
World of Ice ” 氷中の世界。 “ I Shouldn
ot Run out of Swords . If it
is Not of this World Have No ” 斬
れぬ物など無い刀。有るならばそれはこの世の物ではない。
D・W・ - 「 . . . 」

なかなかどうして、こいつは恐らくP4・D1より強い。
神「さあやるう。きっと、暇潰しにはなる。」

D・W・ - 「己が潰れ、それで終わる。」

ベレト「真の影。スキア・スマ影の王冠」。

キマリス「真桎梏シンジツクの力。ただ単純に圧巻し殺す。 “ 真戦闘神 ” 。

P4・D1「さてどうしたものか。」

E2・D1「僕らがトール。」

ベレト「うむ。それでいい。儂がゼウス。キマリスはオーディンを
それぞれ殺れ。」

ゼウス「ケルキオン。」

オーディン「神馬スレイブニル。グングニル。」

トール「俺の相手は小さい弱者2人か詰まらんね。」

P4・D1「言つてろデカブツ。」

E2・D1「確実に殺す。」

トール「神に対する態度を改めさせてやるう。ニヨルニル。」

神狩りか、一度やってみたかった。

S・A 「 “千刃の谷” ！」

偽轍 「 ・・・ 」

全て弾かれる。

所詮偽者と偽物なのにこれが。

“祢々切丸”を折った回数は既に三回。

光が出したAgenziaとかいう奴は武器を影で構成している。

どうやら見た物を光で投影しているらしい。

黒いオーラも見たまま投影しているだけだから実際のレベルは〇つ
ぽい。

もし20なら折れるはずがないし、逆に俺のグラムはとっくに折ら
れているはずだ。

偽轍 「 ボソボソ。 」

S・A 「 ツ！ 」

スドドドド。

“千刃の谷”か・・・！

S・A 「 ハアツ！ 」

偽轍 「 ・・・ ！」

ガン、キン、カンカン、ギン。

偽者だが・・・太刀筋は本物だ・・・！

E・NE 「 ぐつ！ 」

ジ「く・・・！」

ヒ「ぬ・・・！」

どうやらあちらも強敵の様だ。

S・A 「 つと！ 」

繰り出される斬撃をぎりぎりで避ける。

そのままバク転して・・・。

S・A 「 とは、おつと。いかんな！ 」

キン、ギギギギバリン。

Create 剣・・・！

偽轍「・・・！」

“祢々切丸”を折り、勢いに任せて剣を投げつける。

S・A「げ・・・。」

あの至近距離で避けるか

S・A「がつ！？」

D・W/「・・・。」

逆に蹴りを入れられた。

S・A「げ！？」

また・・・“千刃の谷”だ！
しかも祢々切丸とユニオン！

D・W/「・・・。」

S・A「間に合え“千刃の谷”！」

キンキンキンキンキン。

S・A「くそ・・・！」

ただの剣と、偽物とは言え祢々切丸だ。
差は歴然すぎ・・・る！

S・A「ぬわつ！？」

ズガガガガガガガ！

T・O・・・「大丈夫かなー？左宇君、おつとつと。」

光「大した奴らだ君達はつ！」

光の斬撃を難無く避ける。

T・O・・・「そーでしょ？“Gun Spada infini

to”無限の剣銃。光の刃端。

「

光「ツ！」

細かい光の刃を投げつける。

体にしつかり着弾したが。

T・O . . . 「やつぱりくらわないのねー。」

光「いや . . . そうでもない。」

T・O . . . 「あらりホントねー。体のあちこちが形成仕切れなくなつてゐねー。」

強いけど、大したことないわー。

代理の方が強そうね。

どうやらまんまコピーしてゐみたい。そりやーあつちのが強いわよねー。

T・O . . . 「ちつ読み間違えたか。」

光「無限の剣銃。光の刃た

T・O . . . 「甘い。」

光「ぐ! ?」

光の右手を切り落とす。

T・O . . . 「終わらせるね。 “イステーク・ネスダク” !

光「ぬわーぐはぎーつー。」

地面に磔にしてやる。

T・O . . . 「 . . . 痛い?」

光「ふ . . . 痛くない。けど終わりだ。良かつたな如月薰。これで君も、更に

「ザクッ。

T・O . . . 「なーにわけ分かんなこと言つてんの。やつと消えなさい。」

S・A「つと . . . !」
E・N E「あれ . . . ? 消えた . . . ?」
ジ「. . . 。」
ヒ「. . . 助かりましたね。」

偽轍の“千刃の谷”内の一刀が俺に直撃する寸前で消えた。

T・O・・・「だいじょーぶ?」

S・A「あ、ああよく分からんが助かった。つてお前のグロアディ
それ・・・。」

銀のオーラを纏っている。

つまり11以上になつたってことだ。

T・O・・・「ごちそーさまでした。なんと500人分よ。」

そりやすごい。

俺なんて15人分しか得ていないので。

T・O・・・「じゃあフルガトリウム解くね。」

・・・他はどうなったかな。

P 4・D 1 「げほ何回目だこれ。」

E 2・D 1 「さつきので17回。」

トール「生意気な口を叩くだけはあるな。それなりに強く、魂を多数持つてているとは。」

P 4・D 1 「はははそうだろう貴様のミヨルニルも大したものだ。」

E 2・D 1 「流石は本物だ是非頂きたいメギンギヨルズとヤーレングレイブルも合わせてな。」

トール「いや大したことはない。なにせ君達の脆弱な体、か細い腕、その手に握られる串の様な剣、どれも壊せないんだからな。」
復活すると壊したことにはならないのか。

P 4・D 1 「そうだなだがそれはミヨルニルのせいではない。」

E 2・D 1 「そうだね僕らが強いだけだよ。」

トール「そうか。では仕方ない。アースガルドの力を。」

ミヨルニルに雷と炎が絡み付く。

P 4・D 1 「あらり。」

E 2・D 1 「もう一死は覚悟だね。」

トール「良い覚悟だ。構えよ、その魂消えぬようにな。『雷鳴大光天蓋之炎』。」

天から炎と雷が降つてくる。

ついでにトールが振るうミヨルニルからも。

P 4・D 1 「まあタダでは死なないよいくぜ『フラガラッハ』。」

E 2・D 1 「その通りいくよグロアディ。」

ベレト「・・・やはり一筋縄ではいかないか。」

ゼウス「当然だ。一介の悪魔に負けていては、神など名乗つてはお

れんよ。」

ベレト「一介の神に負けては魔界の王とは名乗れん。」

ゼウス「・・・」

ベレト「・・・ん、どうやらキマリスの奴は片を付けたらしい。」

ゼウス「なに!?」

折れたグングニル。

もがれたスレイプニルの脚。

上半分が消えた、オーディンの体。

キマリス「・・・わはははははは。さすがに疲れたわい・・・。」

ベレト「よくやったキマリス。」

ゼウス「ぬ・・・」

主はどうやら何回も死んでいる様だが・・・。

奴らを心配する暇は儂にもない。

ベレト「ふ。まあよいわ。儂も本気になる。これで終いだ。祭壇に捧ぐ全能なる象徴。霞の向こうに残る眠り。水平線が地平線に混じり極光。鋆つく鉄鎖に刻印。天蓋に昇る終焉の柵。砂上の楼閣にて黎明の寝に就け。" Deus Occiditur Terrarum

um"」

ゼウス「

」

神「・・・！」

D・W/-「どうした。」

神「・・・いや。ただ、オーディンとゼウスが倒れたというだけだ。

「ほう、もう2体もの神を殺したか。

神「ふん。貴様他人の心配をしている場合か？」

D・W/-「ははは。未だに一度も殺せぬくせに大層な口をきくなよ。」

左腕を切り落としたくらいでいい気になつてもらつては困る。

神「確かに。累計すれば、入れられた数は私の方が多いくらいだからな。」

D・W/-「“千刃の谷・祢々切丸”、固定。“千刃の谷・村雨”、固定。」

しかし片腕が無いとバランスが取りにくいのは確かだ。

“千刃の谷”でカバーしないと若干厳しい。

神「ふふふ。面白いものだ。違つ世界の住人だといつのに、同じ名前で、同じような技が存在するとはな。」

D・W/-「・・・なに？」

神「ふははは。比べるか？来い流星群。貫き、拘束しろ。“千刃の谷”

D・W/-「な・・・・・ち、固定解除射出！」

キンキンキンキン。

済まない祢々、堪えろ！

右手にある真の祢々切丸を神に向かって投げつける。

神「小瀆、な・・・・！」

小賢しい手だが、『剣雨』を使わせてもらつた。

D・W/-「これで相子だな。」

一本の袴々が左腕を切り落とした。

D・W／-「あまり好みではないのだ特性を使うことは。戦いにおいて、自らの力を信じていないことになるのだからな。」

神「構わぬ。そもそも神性を持たぬ貴様が私との戦いで小狡い戦法を使うのは当然だ。」

D・W／-「成る程。嘗められているな私も。」

神「そんなことはない。私もこれで、かなりの力を出していい。だが、高次の生命体である私が貴様を未だに一度も殺せていないというのはなかなか由々しき事態だ。というわけで死ね。」

D・W／-「阿呆な。」

神「逃れられぬ死を感じるがいい。一の雨、十の雪、百の風、千の死。世界に散らばる全ての狂氣を貴方に。『インス・レド・インスデーノウ』。」

馬鹿な・・・！

神「ほう。知っているようだな。初弾が当たれば確実死、といふことも分かっているな？」

D・W／-「ふ、勿論だ。」

初弾に当たれば様々な痛みに蝕まれ死んでいく。

避けられなんということはないが・・・。

神「さあ踊れ。そして避ける。でなければ死だ。」

問題は初弾が億の雨ということだ。

D・W／-「ふ、まあいいさ。抜けば玉散る氷の刃。『村雨』。」

呪文を詠唱し万全の体勢をとる。

そして村雨の特性『凍獄』に加え共通特性『氷纏』。

神「全てを凍り尽くすか面白い。行け死の雨。」

D・W／-「いくぞ村雨眼前の敵を零に落とせ。」

ゼウス「……よくもやつてくれた、悪魔の分際で。」
ベレト「ふん……あの空間でここまで抵抗されるとは思わなかつた。流石はゼウスだ。誇つていいそのまま死ね。」
ゼウスの体が光と散り消えていった。

ベレト「……主よ、儂は少しばかり疲れた。帰らせてもらひ。」
P4・D1「はい……かえ、ごふつ……。」
E2・D1「は……がはつ、しんど……。」
返事はままならなかつたがベレトは帰つてしまつた。
トール「……は、はははは。た、タングリス二とタングリヨーストを……つれ、げほつがほ……連れて来るべきだつたなふはは……。」

トールの右腕は腐り落ち、腹には大きな穴が空いていた。

P4・D1「ま……俺の魂は21消費されて、おまけに今は右脚が無い。」

E2・D1「魂26消費……右腕無し……。」
P4・D1「スマンな秀一特性を使わせたせいで。」
E2・D1「いいよ別に使わなきや勝てなかつたろうじ。」
トール「くはははは……余裕だな貴様ら。……まだやれるが、面白かつたしこの辺で許してやる。」

ゼウスが消えた時のように光に包まれ消えていった。

P4・D1「最後まで……。」
E2・D1「豪快な奴だつた……。」
いや……待てよ、なにか忘れてるような……。
二人「……あ。」

P4・D1「……もう一回召喚する力はちょっとないな。」
E2・D1「シャックスなら召喚出来るでしょ代理を頼めば?」
P4・D1「仕方ないか。72柱の1柱。序列44、30の軍団を

収める魔神。命を運ぶ鳥。感覚の与奪者。財の限りを集め『え。来たれ虚言の侯爵“シャックス・ソロモン”。』

・・・

パチン。

シャックス「お呼びか主よ。」

P4・D1「あのを指鳴らさないと出てこないってのやめてくれない？」

E2・D1「めんどくさい。」

シャックス「まあそういうな主よ。それで用件は何ぞや。」

P4・D1「此処が何処か分かるか？」

シャックス「ふむ。詰まらないテストですな。“ロード・デス・ウオーヘル”、ベレトの箱庭ですな。・・・ふむ、ベレトが見当たりませんが？」

E2・D1「そこまで気づいたなら察してくれ。」

シャックス「つまり解除してほしいということか。任せなさい。頂くモノは頂きますが。」

P4・D1「はいは構わないよ100か1000か？」

シャックス「主ですので。100で構いませんよ。では頂きます。」

P4・D1「ぐ。」

体から抜けていく100の魂。

シャックス「確かに。ではいきます。解説。一重二重三重四重。連なる列なる層44。対象“ロード・デス・ウォーヘル”。^{エジーリヨ}“解除”。

「

ヒューローク・彷徨う彼方 -

D・W／「……。」

決まった。

勝者は私だ。

「おいおいおいー！どういうことだよこれはー！未来ー！」

「私が知るはずないだろ。」

神は、壁に磔にされ絶命していた。

S・A「・・・それで、どうする？」

T・O「私はまだ余裕あるけど。」

E・NE「・・・無理。」

P4・D1「ま俺も遠慮しておきたいかな。」

E2・D1「右に同じ。」

D・W／「私も限界だろ。」

全ての神族を殺し、偽装空間から帰還した俺達は現在臍体になり神の部屋に居る。

そこに真・ラスボスが来た。

戦うか戦わないかを議論しているが、反対多数でやめだな。

T・O「えつまんないよ。」

S・A「馬鹿、お前は良いかもしけんが俺達は良くないんだ。ちょっとは協調してくれ。」

T・O「む～左宇君が言つなら仕方ないか。」

S・A「よし。というわけだペルソナ。せつせと出よ。」

P 4 · D 1 「 · · · あ。」

E 2 · D 1 「ペルソナもしかして。」

P 4 · D 1 「出る方法は聞いてないやあはは。」

おいおい勘弁してくれよ · · · 。

「帰りたいか?」

· · · 此処に来てから一番最初に聞いた声が響く。

S · A 「 · · · 醒酔。」

D · W / - 「感触が軽すぎたからな。想定の範囲内だ。」

神「ふむ。貴様はとてもいい戦士だ。誇れ。」

D · W / - 「ありがたく頂戴しようその讃れ。」

神「では改めて聞こう。もう帰りたいか?」

P 4 · D 1 「今日はここまでだ。」

E 2 · D 1 「消費し過ぎた。」

神「そうか。では帰そう。わらばだ。これが今生の別れとならぬよう祈れ。」

ヒューローク・奇妙な一日

S・A 「・・・はー?」

いつの間にか妙の家に居た。

T・O 「・・・ん。眠い。」

隣で妙が目を瞑そうに擦っている。

E・NE 「・・・」

P4・D1 「いやー楽しかった。」

E2・D1 「疲れたけどね。」

D・W 「楽しいことは往々にしてそういうものだ。疲れを最後に感じてこそ、その体験は楽しかったことだと認識できる。多分。

「

醍醐も疲れているようだ。

多分なんて普段は使わないだろうに。」

S・A 「・・・あー体が痛い。とりあえずお開きか?」

T・O 「・・・そーねー。いつまでも家に居られると不快だしね。」

E・NE 「・・・ずばずば言い過ぎだろ。」

P4・D1 「しかし実際そのなお暇するとしよう。」

E2・D1 「そうだね“スロトル・オロスケル・ハウンドヘルベ”

バイバイ。」

太宰兄弟はケルベロスの背に乗り出でていった。

そういう生き物じゃないだろ・・・。

S・A 「あれ? 醍醐はいつの間にか居ない・・・ん?」

紙切れが落ちている。

『また会おう。』

・・・これじゃ泥棒とか悪者みたいだぞ。

E・NE 「んー・・・! ジやあ俺も帰るかな。」

T・O 「やつやと出でつて。」

E・NE 「・・・酷い奴。じゃあなS・A。」

S・A「ああ。」

E・NEは颶夷と窓から飛び出し落していった。

E・NE「ややーー?」

そしてその下には確かに電気の罠が仕掛けられていたな。

S・A「尊い犠牲がまた一つ。」

T・O・・「あはは酷い奴ね~左宇君は。」

お前が言つた。

S・A「あれ?ペルソナの奴DynamicWorldを忘れてるぞ。」

床に放置された大学ノート。

ペラペラ捲つてみる。

S・A「・・・あーあ。」

T・O・・「どつたの?」

S・A「見てみろよ。」

所々に、幽霊という言葉が追加されている。
・・・全く、おかしな一日だった。

プロローグ・絶者の予言・（前書き）

またか。

これは一筋の希望を勝手に見出だされ勝手に田代めさせん。
してやつたりはただの絶者。

絶つ者が希望に繋げるなんて馬鹿らしい。
全てを絶たぬのならば貴様を絶つまでだ。
朧の夢に身を任せていたかつたんだな。
永久にそこから抜け出せなくしてやる。

プロローグ・絶者の予言・

「もしそこのお嬢さん。」

女「ん？ あたし？」

「そうそう。いやー君は今日ついてるよ。」

女「いきなりなに？ ナンパみたいな？」

「なに、私はじゃない占い師さ。今日の君は最高についているよ。今朝食べた卵が双子だった、なんてことはないかな？」

女「双子だった・・・。嘘マジで占い師？ だとしたら超凄いんだけど。」

「君は今日運命の人にお会いよ。その人とは赤い縁で結ばれているようだ。」

女「えー それマジ？」

「私の占いはそれなりに当たるんだ。まああまり期待せず待つてみたまえ。」

女「そう? ま、いいやありがとじゃ あね。」

高校生くらいの女が遠ざかっていく。

全く、アホの至りだな。

占い師が今朝の卵の双子か否かなんて分かるはずもないのに。赤い縁で繋がっている人とお会いのは本当だけじ。

「・・・赤い。赤過ぎる縁だがね。」

珈琲片手に会話は弾ます

「緊急ニュースです。本日午後4時過ぎ、新西市新西町15番通りで女子高生が男に刃物で刺され意識不明の重体に陥りました。男は通行人に取り押さえられ通報を受け到着した警察により現行犯逮捕されました。調べに対し容疑者は

・・・虫酸が走るニュースだ。

カウンター奥から聞こえるアナウンサーの声に思わず舌打ちしたくなつた。

E・NE「落ち着けよD・W/-。ムカつく気持ちは分かるけどそれは全ての前に立つてからぶちまけりやいい。」

D・W/-「分かつてているわ。」

コーヒーを飲み気を落ち着かせる。

E・NE「しかしながら。2回も殺してくれた相手といつして喫茶店で話すなんて俺はやっぱおかしいのかも。」

D・W/-「男は拳で語り、背中で和解し、そして友になつていくものだ。」

E・NE「そういうもんかね。まあいいや。で?今日はなんでもまた俺なんかを呼び出したんだ?」

D・W/-「それはだな。」

「え-速報です。先程病院に搬送された女子高生ですが、搬送後間も無くして死亡が確認されました。」

E・NE「まさか、と思うが今のニュース関連か?」

D・W/-「なかなか察しがいいなE・NE。あれに関わったのはdInn/。」

E・NE「は?それ・・・本氣で言つてるとか?」

D・W/-「本氣だ。」

E・NE「・・・で、なんで俺なんだ?」

D・W/-「お前が良い役だからだ。」

E・N E「は？」

D・W・「いやなんでもない。兄弟は損得感情で動く。ハンシャ
はそもそも興味を示さない。」

E・N E「左宇はどうなんだよ。」

D・W・「お前が断つた場合当たるつもりだ。」

・・・ま、十中八九乗るだろうがな。

E・N E「・・・いや協力する。」

D・W・「そうか。それはありがたい。」

E・N E「俺はなにをすればいいんだ？」

D・W・「世界のワレラベスト30なんかに入っている輩は、大
抵常の者と同じ様な生活をしている。私やハンシャ、左宇に兄弟の
ようにな。だからお前はd I n・が働く会社を見張つてほしい。」

E・N E「・・・いや。いやいやいや。ちょっと待て。なんだその

“世界のワレラベスト30”って。」

D・W・「おや知らないのか。0Zが纏めたベスト30があるん
だ。ただ0位が3人いて22、23、24がないがな。」

E・N E「なんだそりや・・・。あ、俺！俺は入っているのか？！」

D・W・「ふむ。ちょうどいい機会かもしけんな。教えておいて
やろう。お前が知る名も多数入っているのだからな。ではモノロー
グスタート。」

E・N E「は？」

モノローグ・世界のワレラベスト30・

先ずは第0位の3人から紹介しよう。

何故0位かと言つと、戦闘をしないからである。

戦闘をしないのに何故ランキングに入れるのかと言えば、誰も手出しが出来ないからだ。

戦わなければ勝ちも無し、逆もまた然りというわけだな。

では第0位の1人目、言わずと知れた0ノ。

奴はある空間から出られないし、あの空間での戦闘は不可能。

第0位に入るには十分すぎる奴だ。

2人目はX a n aこと佐奈。

奴はワレラになつてから今まで、自らの特性である『桃源郷^{パラダイス}』の中に引きこもつてゐる。

干渉は不可能であるから第0位。

最後に3人目、h / S . こと椎名サンザ。

『^{ソマ}存在値^{フォス}は光の屈折』といふ自らを透明化させる特性を使つており干渉不可能。

さあここからまともなランキングの開始だ。

□を挟むんじやないぞE · N E。

第1位、V e . I Eこと不快者。

特性は『^{タクサイ}確率^{スパオ}破綻^{アフトクラトニア}の国』、詳細は不明だ。

第2位、は目の前にいる私D · W / - こと轍醍醐だ。

特性は『^{カゲウタ}深部^{プロフォンダ}に至るは全てを知つた』、あらゆるモノの“深部”に入り込む。

第3位、G · X、詳細不明。

第4位、G 4 · N E、詳細不明。

第5位、T · O · こと大城妙。

特性は『^{レフレクショ}反射^{テッラ}ハンシャくの国』と『強制解除』。

詳細は省く。

第6位、P4・D1こと太宰・ペルソナ。

特性は『古書』、詳細は省く。

第7位、d0GCこと選択者。

特性は『神の意志などないに等しい。取捨はまた容易く』、全ての事象に對して等しく“選択”する権利を得る。

第8位、DIEことダイオレス。

特性は『殺意の咆哮響く国』、空間転移特性で詳細不明。

第9位、D e e tことディート。

特性は『纖細なる殺意の国』、空間転移特性で詳細不明。

第10位、d0S1ことディオス。

特性は『殲滅帝国』、詳細不明。

第11位、S . A . こと阿部左宇。

特性は『最奥の地下水路』、詳細は省く。

第12位、J . A 5こと古賀奈保。

詳細不明。

第13位、E . X . こと出宮真。

特性は『真理の国』、詳細不明。

こいつはそもそもワレラがどうかも怪しいらしい。

第14位、S I O Nことシオン。

特性は『火となり灰となれ』、人以外のモノを爆破したり出来る。

第15位、I I I ことサナイ。

特性は『無限の廻廊続く国』、詳細不明。

第16位、T H U Nことサン。

特性は『原点の雷』、詳細不明。

第17位、N i n g Jと中田。

特性は『凍える寒さの水面に落ちる』、空間転移特性で詳細不明。

第18位、C A b Tこと兜。

特性は『暗闇の空』、詳細不明。

第19位、E U / ことレンゴウ。

特性は『選択するは個人の自由』、詳細不明。

第20位、dIIn/ことルチアーノ。

特性は『望みを絶つ海』、99の希望を『えてから1の絶望を『えることで100の絶望に変える。

第21位、A·A0こと吾桑。

特性は『快樂主義者の空』、対象に快樂をぶつけ溺死させる。

第25位、E²·D¹こと太宰秀一。

特性は『支えの空』、詳細は省く。

第26位、D·G0こと裁断介添人。

特性は『真偽じや我の前に明快』と『裁断介添人』。

詳細は省く。

第27位、D·I·E/Kこと殺人請負人。

特性は『殺人請負人』、詳細不明。

第28位、D·G0/こと裁断請負人。

特性は『裁断請負人』、詳細不明。

第29位、Ediaこと自殺介添人。

特性は『自殺介添人』、詳細不明。

第30位、伍堂の女。

特性は『他者の愛』、死んだ魂を束縛し拋り所に連れていくことで

ワレラとする。

これが現在のランキングだ。

D・W・ - 「一人語りというのは疲れる。」

E・N・E 「ご苦労さん。しかし左宇の奴も入ってんだな。俺より後にフレラになつたくせに・・・。」

D・W・ - 「奴の特性はかなり特殊だからな。」

実際に使われれば抜け出すのはほぼ不可能。

基本的に殺されることしか選べないらしい。

E・N・E 「ふん、まあなんでもいい。実際にd・I・C・Hとやるのはお前なんだよな?」

D・W・ - 「当然だ。お前はなんとなく見張つていればいい。」

奴は特性以外そこまで特筆すべき力は持つていない。

恐らく、まともにやればE・N・Eなら勝てる。

だが奴は私がやらなければならない。

E・N・E 「ああ分かった。」

D・W・ - 「あまり近づくと、お前が奴の特性に巻き込まれる可能性があるからな。」

E・N・E 「オーライオーライ任せとけ。で、絶者の野郎はどこに居るんだ?」

D・W・ - 「奴が今潜り込んでいるのは萩矢建設^{はぎや}。市街地のビル群を建設中の会社で、奴はその指揮を任せられている。」

E・N・E 「へえ。かなりの遣り手だな。」

D・W・ - 「建設現場から東に50m程離れた場所に部屋を確保しているから、そこを使つてくれ。」

E・N・E 「準備がいいこつて。じゃ早速行つてくるわ。マスター、勘定置いとくぜ。」

E・N・E はカウンターに小銭を置き出でいった。

全く、頼んでおいてなんだがお人よしな奴だ。

奴は実益主義者じゃないのか?

マスター「相変わらず威勢がいいなあいつは。」

D・W/ - 「む。マスターはE・NEと知り合ったのか?」

マスター「ああ。あいつが生きておる時から知つていい。ハハハ。それに、なにを隠そあいつをワレラにしたのはこの私なのだ。」

D・W/ - 「ほう。それは初耳だ。」

マスター「だらうな。時に醜醜。」

D・W/ - 「なにかな?」

マスター「あいつ10円3枚ばかを置いていきよつたわ。あと270円、立て替えといつおくれよ。」

D・W/ - 「・・・。」

奴に頼んだのは間違いだつたか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3558y/>

JETBLACK-P.D.G-

2011年11月23日22時48分発行